

カザフの人



「第一回イヌワシ祭、第二回イヌワシ祭連続チャンピオン、我がサグサイが誇る偉大な鷹匠、Mana氏の登場です！」とのアナウンス。会場の大きな拍手、声援をうけて、岩山にいるイヌワシを呼び寄せるために、颯爽と馬に乗ってManaさんは現れた。彼が岩山の方にクルッとまわり、「カッ！カアッ！」とイヌワシを呼び始めるや、イヌワシが飛び立った！場内はそのあまりの早い反応に「おおっ！」とどよめいたが…。

イヌワシは彼の所には来ないで、まったくちがう方へ飛んで行ってしまった…。Manaさんの子どもたちがそのイヌワシを追いかけて走って行き、彼は、トボトボと競技場をあとにした。

「まったく、なにやってんのよ！恥ずかしいったらありゃしない！あんなに大々的に紹介されておいて、もう、ほんとにっ！あー、はずかしい！」と怒りだしたのは彼の奥様…。でも、当の本人は「ま、そんなこともあるよ」と涼しい顔だった。

イヌワシのことを知り尽くしている彼は、意のままにならないこともよく知っている。それでも、彼のイヌワシ調教のレベルが高いことは、彼の息子たちのイヌワシたちが祭で度々入賞するのをみればよくわかる。

初めて会った年(2010年)のイヌワシ祭の最後の日に「わしゃ、このイヌワシのおかげでおまえに会うこともできたんだよ。また来てくれよな」と言って、その場で来ていたチャパンとズボンを脱いで(写真真ん中)、「着て帰りな」と私にくれた。

訪ねると酒をひっかけて、ドンブラを弾きながら、昔話をしてくれるとても気さくでやさしい人だった。





奪われつつつけた魂を憂う



南モンゴルのチャガー(馬乳酒)作りを生業にしている牧民宅で迎えた朝。群れが連れ戻されて、子馬が柵に入れられる。その後、母馬を捕らえて搾乳する。日中、子馬たちには飼料を与えるが、これは牧地が限られたことの影響だ。モンゴル国の牧民のように地面に子馬つなぎ紐(ゼル)をはらず、子馬一頭ずつを捕まえるなど、人が手を触れることは少なくなってしまう、人に慣れにくい。また、放牧にバイクを使うようになったことで、馬と人との関係はかつての遊牧民のそれとは本質的に異なったものとなっている。

タブーを破る時が来た…

「モンゴル情報紙しゃがあ」を創刊したきっかけは、モンゴルのことを知ってほしいということだった。1991年の留学中に世話になった素晴らしい友たちに恩返しをしたいと思ったのだ。彼らは、中国共産党政府が、「起きた事実そのものをなかつたことにしようとしている」あの天安門事件直後の南モンゴル地域で、様々な自由を奪われた状況の中であつたにも関わらず、私にたくさんのお話を教えてくれた。彼らが言った「あと50年したら、この地域のモンゴル人はモンゴル語を話せなくなり、モンゴルの歴史もわからなくなってしまうだろう」という予言が実現してほしくないと思う私は、彼らのことを記録、記憶しなければならぬと思ったのだ。それが私にできる唯一の恩返しだと考えたからだ。そのためにはモンゴルのことをもっと知らねばならないので進学をし、そして、知り得たことを伝えたいという気持ちが「しゃがあ」を作り、現在に至っている。この詳細は、すでに廃刊になっているが「もっと知りたい国モンゴル」(心交社)に書いた。

その後、活動を展開していく上で、モンゴル国と関わる事が多くなり、南モンゴル地域とは少々疎遠になってしまっているが、そこに住む人々をただただひたすらに愛おしく思っている。

しかし、従来「しゃがあ」はモンゴルの文化・歴史・習慣を扱うこととし、政治経済問題を特に、敢えて、扱わないようにしてきた。天安門事件の後に留学した南モンゴル地域というところでの見聞は、「取扱注意」の張り紙が必要なモノがおおく、私が下手なことを言うと、もしかすると大切な人たちに大いなる迷惑をかけかねないからである。しかし、そこで感じた怒りを決して忘れることはできなかった。彼らの置かれている社会的立場、状況に対して何かできないだろうか?と考えると、結果、モンゴルのことをできるだけたくさんの人に知ってもらえば、南モンゴル地域の悲しみを知る人々も増えるに違いないと思ったり、「文化、歴史、習慣」などをテーマとした情報誌を発行することとしたのであった。

しかし、もう黙っていられない…。中国共産党政府はふたこと目には内政干渉だと言い放つが、自分とつながる人々が直接的に不当な扱いを受けている状況を看過することは、さすがにできなくなったのだ。

よって、今号の「しゃがあ」では、政治問題を大きく取り扱わないという今までのルールを変えて、南モンゴル地域が置かれている状況について、正面から書き綴ることとした。

憲法違反の暴挙!

2020年9月、モンゴル民族であり続けるために最も大切な「モンゴル語」の存在自体をいよいよ脅かす事件が起きた。

中華人民共和国中国共産党政府は、義務教育におけるモンゴル語による教育を廃止し、すべて漢語で行うことを決定したのである。

しかし、このこと自体が、中華人民共和国憲法に違反している。中華人民共和国憲法第四条には

「各民族は、すべて自らの言語文字を使用し及び発展させる自由を有し、自らの風俗習慣を保持または改革する自由を有する。」

と明記されている。もう少し、詳しく述べることにしよう。この中国の憲法が制定されたのは1954年のことであるが、「中国人民政治協商会議共同綱領」というのが中華人民共和国建国の同年1949年に制定されている。これが5年間にわたって事実上、憲法のような性格を持って扱われていた。この綱領の第六章「民族政策」においては、実に仰々しく、恭しく、高らかに民族平等をうたっている。少々、長くなるが、参考までに抜粋しておこう。

第五〇条

中華人民共和国領域内の各民族は一律に平等であり、団結・互助を実行し、帝国主義と各民族内部の人民の共通の敵に反対し、中華人民共和国を各民族友愛協力の大家庭にする。大民族主義と狭隘な民族主義に反対し、民族間の差別・抑圧および各民族の団結を分裂させる行為を禁止する。

第五一条

各少数民族が集居する地区では、民族の区域自治を実行し、民族が集居する人口の多少と区域の大小に照らして、各別に各種の民族自治機関を設立すべきである。およそ各民族が雑居する地方および民族自治区では、各民族は当地の政権機関のなかで、相応の定数の代表を持つべきである。

第五二条

中華人民共和国領域内の各少数民族は等しく、統一的な国家軍事制度に照らして、人民解放軍に参加し、および地方人民公安部隊を組織する権利を有する。

第五三条

各少数民族は等しく、その言語・文字を發展させ、その風俗・習慣および宗教信仰を保持あるいは改革する自由を有する。人民政府は、各少数民族の人民大衆がその政治・経済・文化・教育の建設事業を發展させるのを援助すべきである。

もしもここに書かれていることがその通りであるならば、賞賛に値するのは誰もが思うところだろう。おそらくこれが制定された当時、それなりに、中華人民共和国、および中国共産党に希望を感じた人々も少なからずいたことだろう。日本にすら、中国への憧れ、尊敬を持つ人々がいたぐらいだからである。

しかし、実際の中国共産党政府が、このあと行ってきたことは、ことごとく、非漢民族にとっては、「裏切られた」と思ったことだろう。約束は反故にされ、もしくは圧倒的多数を占める漢民族の「民意」や「利益」が優先され、少数民族側は少しずつ、大切なモノを奪われ続けたのである。少しずつ、少しずつ、変化をさせていくやり方をサラミ戦法と言うが、中国のやり方はまさにこれなのだ。こそこそと領海侵犯を繰り返しながら、この侵犯行為を日常化し、それをもって、昔から、我々のモノだったのだと言いつつのが中国式だ。

そもそも、中国という国の形は、国民国家ではないし、法治国家でもない。中華人民共和国憲法で国家は中国共産党政府の指導を仰ぐとしている時点で、この国家が中国共産党の胸先三寸でどうにでもなってしまうことがよくわかる。そして、この政府は約束を簡単に反故にしてきたのだ。

さて、そんな国家であるが、この国に暮らす人々は、その歴史に明らかなように、食べられるうちは国家に対して文句を言わずに従ってしまう。食べるものに窮した時に、立ち上がるという特性を持ち、それを繰り返してきた。よって、経済發展が右肩上がりであれば、政府に従う、もしくは政府が金をばらまきさえすれば、何でも言うことを聞くのである。そのためといったら語弊もあるのだろうが、この国の貧富の差はほとんどもないレベルにわざととしておいて（まあ、どこの国も大してかわないのだろうが）、

貧民層にわずかな金をばらまくことで、その数の力をもって社会を操作しようとする。ネット上の反政府的な発言を封殺するために嫌がらせの書き込みをさせたりなどしてきた実績がある。

さて、本稿は中国の悪口を書くことが目的ではない。ここまで書いておいて、何をいまさらといわれるかもしれないのだが、南モンゴル地域に暮らしているモンゴル人や新疆ウイグル地域のウイグル人、カザフ人、またチベット人や香港人たちが暮らしている場所がどういうところであるかを知っていただきたく少々紙面を割いたこと、ご理解いただけると幸いである。

モンゴル語は「遅れた言語」

さて、話をモンゴルに戻す。

2020年9月から強行されたモンゴル教育撤廃の理由が傑作だ。モンゴル語は先進的な知識、科学技術を表現する上で不適当であるという理由でモンゴル語教育をやめるとのことらしい。

なんと失礼な話だろう。モンゴル語話者たちが、ここで言われる「先進的な知識、科学技術」を理解できない、表現できないというのだろうか？もちろん、否である。なんでもかんでも漢語を当てはめて（例えばコンピューターを電腦）、まるですべての文化や事象が中国発であるかのように誘導するのが中国式文化・歴史歪曲方法だ。モンゴル人たちは外来のモノを、ほぼそのまま受け入れ、モンゴル語の一部にする。この異文化に対する姿勢というのは、非常に合理的であり、これであれば、別の言語を話すものとの相互理解はしやすい。たとえば、「コピーする」という単語は、モンゴル語単語の他に、「キャノンダフ」（キャノンする）という単語もある。おそらく海外からやってきたコピー機がCanon製だったのではないかとついでにいうと、モンゴル語でガムテープのことを「スコッチ」と言う。もちろん、これは3M社のScotchテープが語源だ。日本語で接着剤を「セメダイン」といったり、接着テープを「セロテープ」といったりするのと似た感覚である。外来文化やモノを受容する際に、無理矢理、母語化しない。従って、あまり胸の張れた話ではないが、通訳の現場で、専門用語に困ったら、英語をモンゴル語的に発音することでごまかせることもあるくらいだ。

止まれ…。

モンゴル語を「遅れた」言語であると決めつけ、漢語による教

きれいに整備されたチングスハーン廟と公園。

以前からあった廟もモンゴル人懐柔政策の一環として作られたものであったが、多くのモンゴル人たちにとっては心のよりどころでもあった。しかし、廟内に描かれたモンゴル遊牧民の生活風景は、家畜の解体の様子で、地面に血を垂れ流しているなどを観るに、モンゴル人の習慣を知らない何者かが描いたことは明白。漢民族にとってはモンゴル遊牧民の優れた世界観などに思いを巡らすことも、尊敬することも、いや、それどころか、まったく興味がないのだろう。公園の豪華さが、モンゴル文化、歴史を尊重しているのかというむしろまったくそうではないと知った方がいいだろう。



育を幼少期から行うことが国家の発展のためには有益だという。漢民族の言う発展というのは経済的利益を追求することだ。中国共産党下における中国というところにおける価値は徹底した唯物論によって支配されている。中国式唯物論と言った方が正しいのだろうが、これは経済価値として換算できないモノをことごとく切り捨てる。精神文化、宗教文化のような、カネを直接生み出さないものはすべて無駄で、遅れたモノであると切り捨てるのだ。従って、寺院を補修するとなったら、元の寺院を作った人々の信仰心に寄り添うことなく平気で形を変えてしまう。建物の形を変えるに飽き足らず、とある寺院にあったかつての見事な千手観音像は撤去され、そのあとに安置された仏像には4本の手があるのみで、仏像の後ろの壁にたくさんの手のひらの絵を描くという始末だ。信仰心を持たない者がまさに「適当に」作ったものがそこに置かれていた。以前、しゃがあの記事にも書いたことがあるが、2006年の北京オリンピック開催時にやってくる外国人旅行者に対して、「昔から多民族国家であった」というでっち上げをするために各地の寺院や博物館を改修したようだ。そのときに、1991年時に私が見ていた寺院とはまったく形の違うまがい物がきれいに建てられたのである。

しかし、文化というのは、それぞれが唯一の価値を持ち、無駄であるとか、遅れているという判断をくだして善いものではない。それぞれが唯一無二の存在なのである。常に発展し、変化し、適応し続ける可能性を秘めているのが文化なのだ。形のあるものはオリジナルの形を尊敬するべきであろう。形のないものは、その存在を尊敬するべきであろう。しかし、金勘定にしか興味を持たない漢民族がほとんどを占めている中国共産党政府はそんなつもりは毛頭無い。先に長々と引用した憲法を彼らは紙切れ同然に扱うのである。

そして、文化の根幹を作る言語に対してもまた、同様の屁理屈でいちゃもんをつけ、「こうすることが発展なのだ」と自分たちの価値観を押しつけながら、それでいて、親切でやっているのだというのだ。

この流れを見るに、もう黙っていられなくなった…。

モンゴル語とモンゴル人

私自身、南モンゴル地域のモンゴル語の影響を強く受けた。ただ、私が使う語彙の多くはモンゴル国側で使われる言葉たちだ。もちろん、発音は下手くそ。そんなわけだから、南モンゴル地域を行けば「おまえ、モンゴル国人か？」と言われ、モンゴル国を行けば「おまえ、南モンゴルから来たのか？」と言われることになっている。しかし、そんな変なモンゴル語だとしても、「きっとどこかのモンゴル人だろう」と思われ、扱われることになっているのがおかしい。いや、相手がモンゴル語を使う人物であれば、とりあえずでも同胞として扱う(時に差別的な行動も見受けられるが…)ことは、素晴らしいことのように感じられる。「変なモンゴル語だなあ」と思っても、「ま、いいか」と受け入れてくれるのだ。

しかし、「モンゴル語を話せないモンゴル人」に対しては、ぼっさりと「モンゴル人ではない」と断言する場合も少なくない。中華人民共和国によって占領支配されている南モンゴル地域の、現実の生活を知らないモンゴル国の人々にしてみれば、生き残るためにやむなくモンゴル語を捨てざる得なかった同胞たちの苦しみは理解しにくいだろう。とはいえ、一概に、モンゴル語を話せない=モンゴル人ではないというのは、少々、酷で気の毒だ。彼らはその状況を望んだわけではないのだから。

かつて友人の結婚式に出席しようと南モンゴル地域のフフホトに行ったときのことで。私を迎えに新郎と彼の友人たち5人ほどが来てくれた。そのうち4人はモンゴル語を話せないモンゴル人だった。昼食に入った食堂で、すぐに酒宴となり、歌を歌うこととなった。私がモンゴル語の歌を歌うや、彼らはたどたどしい、下手くそなモンゴル語であったが、知っている限りのモンゴル語を駆使したのだろう。「すまない、兄さん、俺たち、モンゴル人、モンゴル語、歌、歌えない。でも、にいさん、歌ってくれた。ありがとう、ありがとう。おれたち、はずかしい。ごめん」と泣きながら「訴えた」のだった。彼らは自分たちがモンゴル人であることに誇りを感じているのに、モンゴル語を話せないことを恥じ、そして、悔やんでいることは痛いほどに伝わったし、現



1997年に立ち寄ったオルドス・モンゴル人の家。モンゴル人の家には必ずヒーモリ(風にたなびく旗状の布)とスルド(チンギスハーンの旗)がそびえ立っていた。朝にはここで献茶をするのだという。

この地域は非常に乾燥していて、家畜を飼育するのは難しそうだが、ここ、エゼンホロー(現オルドス市)はチンギスハーンの墓守として集められたモンゴル人の末裔が、その役割を果たさんと住み続けてきた。

今、「開発」が進んだこの土地で、彼らはどのような暮らしをしているのだろうか？

スルドは立っているのだろうか？



牧地を囲われ、移動できなくなったモンゴル人は一定の土地の中でどうにかやりくりして家畜に草を与えなければならぬ。モンゴル国と比べていささか草の丈が高いのが救いではあるが、その経済的な発展は頭うちされているのが現状である。そういった状況に政策的に追い込んでおいて、その困窮を救うのが「漢化」であると誘導するのが常套手段だ。すべてがシナリオで、気がつくとも、身動きとれなくなってしまっている。
この地域では馬乳酒製造販売を行うことでどうにかやっているが、広い牧地を必要とする馬乳酒製造の未来が明るいとは到底思えない。

地でよく耳にする「仕方ない」という言葉の本当の意味がわかったような気がした。

言葉は世界

ここで少々、モンゴル語について思うところを話そうと思う。最初に言い訳しておかねばならないのだが、私は言語の専門家ではない。従って、言語学的とか音声学的とかそういう側面から話すことは出来ない。ただ、知っている限りで、モンゴル語の素晴らしさを書き記したい。言葉の専門家ではない上に、モンゴル語の語彙も知識も20年ほど前からそう大して変わっていない私であるが、モンゴル文化を知る上で、モンゴル語を拠り所として彼らの世界観や考え方、感じ方を紐解こうとしてきた。

例えば、生まれて丸一年経った馬をなぜ「ダーガ」と呼ぶのか？「ホロード」と呼ばれる乳製品はなぜ「ホロード」なのか？などは、下手をすると「辞書に書いてあるから」を理由に、「生まれて丸一年たった馬」「二歳馬」、「乳製品の一種」などという説明で看過されてしまうことが多く、「なぜそのように言い表すのか？」が考えられることは少ない。語彙自体を分析するこの重要性は田中克彦氏は指摘し、文献に依拠して、モンゴル語の乳製品に関する語彙分析を行っており、非常に独創的で示唆に富む論文であったが、その後、更なる語彙分析を伴った乳製品研究は行われていない。語彙分析をする場合、近隣諸言語との関係や地域差などを考慮する必要があるなど、極めて広範なる知識を必要とするため、おそれて手出しができないというのも事実であろう。いや、もしかすると、ただ単純にモンゴル語習得の敷居の高さが原因で、ただ避けて通っているだけなのかもしれない。さらに言うならば、「結論を出せない問題」であるから、「問題にしない」ということなのかもしれない。どうやら学問というのは、結論が出ることが絶対であって、結論を出すための試行錯誤自体は学問と呼ばれないように思ってしまうのだが、私は研究者のつもりがないので、中途半端なことを言って、最後に「しらんけど」などと言わせてもらうことにしている。違うのであれば、反証してもらえばいいし、価値があると思ってもらえるなら、検証してもらえたらいいなというスタンスだ。

何が言いたいかと言うと、モンゴル人が見ている世界はモンゴル語で表現しないとイケないということなのである。翻訳してし

まうと、違うものになってしまうのだ。言葉の意味というのは、あくまでもそれぞれの利用者のもつ概念を、彼らがお互いに理解し合える一致点をもって作られている。たとえば、「綺麗」という対象が「どこからどこまで」「なにからなにまで」というのは本来であれば人によって異なるところを、なんとなく、ある程度的一致するところで納得し、「綺麗」と表現することになっている。これは個人のレベルでも誤差が生じるものであるが、異なる文化を持つもの同士の場合は誤差の幅はとて大きなものになることがある。抽象的な単語であればこの傾向はとて大きい。東京外国語大学で教鞭をとられていた若林教授は「ビューティフルの意味、わかりますか？「すばらしい」？？？ちがいますよ。ビューティフルの意味は「ビューティフル」なのです！」と大学受験ラジオ講座で言い放っておられて、爆笑した記憶があるが、まさにこれなのである。

もう少し、モンゴル語の話として具体的に示そう。

例えば、車に乗って草原を走っている時に、馬がたくさんいるのを見かけたとする。日本人は「あ、馬だ」と表現することが多いだろう。「あ、馬たちがいる」とか、「あ、馬群がいる」とか表現することは少ない（と思う）。そして、モンゴル人通訳さんに、「馬ってモンゴル語でなんというのですか？」と訊ねると、おそらく、「モリ」と教えてくれるだろう。で、「ある、いる」を「バイナ」というのを知っていると、「モリ バイナ」で「馬がいる」と表現できるので、草原にいる馬たちをみて、「モリ バイナ」と表現することになる。間違いではない。が、しかし、モンゴル人的には違和感を感じるのだ。厳密に言えば、「モリ」とは人間が利用する馬であり、通常去勢された馬を指し、この例のように車窓から見える馬たちは「アドー」と表現する。意味は、「馬群」また総称としての「馬」となり、この群れの中には雄馬も雌馬も場合によっては子馬もまぎって、「モリ」だけではないし、むしろ「モリ」だけの馬群はともめずらしい。「馬に乗りたい」というときには「モリ」を使うのは適切だが、ここで「アドー」を使うことはない。「馬群に乗る」というのはあり得ない…。

夏になると遊牧民宅ちかくにロープ(ゼル)が張られ、そこに子馬が繋がれていることが多い。時間が来ると子馬の近くに大人の馬たちが戻ってくる。その馬たちをさして、「あ、モリが来た」



四子王旗にある学校らしき建物。壁には大きな文字で、
 -生まれてから学び続けた民族の言葉-
 -決して忘れてはならぬ文化-
 とある。
 高らかにモンゴル語、モンゴル文化を掲げたこの学校で、
 いまや、モンゴル語による教育は行われなくなっているのか？

という、これまたおかしなことになる。子馬のところに戻ってきている馬群は、雌馬たちで構成されている。自分の子どもに乳をやるために母馬が帰ってきているわけだ。そう、「モリ」は去勢馬であるから、母にはなれない…。従って、「グーが来た」というのが正解となる。

彼らがこのように馬の名称を細かく使い分けるのは、遊牧生活において情報交換をするのに識別子として必要だからである。「グーを連れてこい」「アズラガ(未去勢馬、種馬)はどこだ?」「オナガ(新生馬)つないだか?」などのときにいいわけの必要があるのだ。そして、それぞれの単語自体に意味があり、それぞれがモンゴルらしい特徴を有するのである。

さて、ツァガンなる単語がある。「白」を意味するモンゴル語だ。これは、「白」という色を表しているが、「聖なる」「清らかな」「けがされてない」などの意味をもって使われる。ツァガンという単語は具体的な色の他に抽象的な「何か」をも表す言葉である。ところで、このツァガンという言葉が何か別の言語の単語に置き換えられたとして、これが持つ抽象的な意味が置き換えられた別の言語において必ずしも同じ意味を持つかというところではない。「白」という色がそれぞれの文化の中で持つ意味は異なるからだ。「白い馬」と聞かされたとき、モンゴル人が思う馬の様子と日本人が思うそれとは異なることになる。

単語は意味を持つが、この意味はある一定の、しかし、境界線があいまいな意味の範囲をもっている。この範囲というのは文化によって、場合によっては人によってさえ、異なっている。異文化言語の単語が自分の知る言語の単語と一対一の対応をなすことはむしろまれなことであって、異言語理解というのは、それなりに深い異文化理解が伴わなければならないのだと思うのだ。

言語を訳すと言うことは文化を訳すということであって、とても難しい。さらに言えば、言葉を訳すということは、その言葉を話す人々にとっての世界を理解することだと私は思っている。そして、声を大にして言いたいのは、言葉が消滅すると言うことは、一つの世界が消え去ることなのだ。だから、決して、人為的に、意図的に、言語を消滅させるようなことをしてはならないし、もしそれが行われるというのであれば、それは虐殺行為であると断言せざるを得ないのだ。

そう、中国共産党政府はそれを行おうとしているのである。

確かにややこしいモンゴル語とモンゴル文字

さて、モンゴル語の話をしよう。とはいえ、このモンゴル語は、とんでもなくたくさんのバリエーションを持っている。モンゴル帝国がとんでもない広さに及び、かつ、他言語に対して非常に柔軟にあたるモンゴル人たちであるから、周辺諸民族の言語を取り入れ、利用しながら変化させ続けて現在に至っている。従って、地域ごとの特徴を言い出したらきりが無くなってしまふ。それらすべてがモンゴルだ。かつてチンギスハーンはその広大な土地に住む人々を支配するに、各地の言語や宗教をそのままよいとしたという。世界の歴史において、異文化に対してここまで理解を示した為政者、征服者はいないのではなからうか? チンギスハーンをとんでもない残虐な君主であり、モンゴル人が通り過ぎた後は…などという話もあるにはあるのだが、それぞれの地の為政者たちに配下につかないなら、戦うぞと選択を促している。で、結果的に、抵抗したら、「ぶっ殺されて」、彼の支配を受け入れたなら、その地の支配者たちは権力を失うことになるが、民衆にしてみたら、topが入れ替わるだけで、日常生活になんら変化もないし、支障もなかったらしい。どこにどんな価値観において社会を見るかで、見え方は大きく変わるのだが、チンギスハーンによってアジアとヨーロッパがつけられ、大いに各地の文化は影響し合い、そして発展したことは間違いの無いことだ。

んー、どうも話がずれていく…。とまれ、もどれ。

そんな風で作られた巨大なモンゴル帝国であり、異文化に対する許容力を持ったモンゴル人であったために、モンゴル文化やモンゴル語はとてつもなく様々に変化していった歴史を持つ。

いまでこそ、モンゴルという名を冠する地域は、モンゴル国と内モンゴル自治区ということになるが、その他の地域はもちろん、それぞれの内部においても語彙の地域性は大きく、モンゴル語について語るに、一筋縄にはいかないのが現状だ。

さて、そんなモンゴル語なのだが、20世紀に入ってから現在に至るまでに、特に言文一致を問題の核としてモンゴル人たちの中で試行錯誤が繰り返された歴史がある。簡単に言うと、それぞれの地域性を維持したまま、どのように書き言葉と話し言葉を一致させるかという問題だ。モンゴル文字で「山」という単語を書いたとき、それをローマ字に転写したら、agul-aと書く。このま

ま読めば、「アゴラ」となりそうなのだが、このように綴られたモンゴル文字を見て、モンゴル人は、「オール」と発音する。学習初心者してみれば、実に「面倒な話」だろう（とはいえ、私的にはフランス語だって、突っ込みどころ一杯といいたいのだ。例えば、beacoupと7文字も書かせておいて、読むときは「ボクー」だ。語末のpなんて無視されているではないか！だったら書くなあつ！と若い頃ブツブツ言っていたものだ）。

伝統的な縦書きのモンゴル文字は語頭形、語中形、語尾形とそれぞれに異なり、発話される通りの綴りをなさない場合があったり、モンゴル語音と文字の数があっていないなど、習得が難しく、語弊を恐れずに言えば、「面倒な文字」といえる。私個人としては、同じ形をそれぞれの地域の人が別々の読み方をするかもしれないけれど、発話される音が異なっている、同じ形の文字を共有することができる文字で、変な言い方をすれば、様々なモンゴル語の地域差を包含できる優れた文字ではないだろうか？と思うようになっていく。つまり、形を見れば、誰もが意味がわかるのだ。つまり文字の読み方とその意味を理解していれば、語彙の違いさえ克服すれば、書いたものをモンゴル語利用者は相互に理解し合えるということになる。これは現在の南モンゴル地域において顕著に観察できる現象だ。一つの単語を、南モンゴル各地の出身者たちに見せて、「読んで」とやると、彼らの耳にははともかく、私の耳には、全く違う読み方に聞こえることが多くあった。私がモンゴル語を初めて学習した時に出くわした問題がこれだったのだ。教わった単語を教わったとおりの（つもり）に発話するのだが、人によって直されてしまうのだ。それではと、直してくれる人々を並べて、単語を見せて読ませると、それぞれがやっぱり違うのだ。モンゴル国で一般的と言っている発音による「ヤマー」と言う単語（山羊の意）をとっても、人によっては、「イマー」とか、「イアマー」とか、「イマガア」とか…言ってくれるわけで、学習者はどれを覚えたらいいのやら戸惑うしかない。

北モンゴルの文字改革

しかし、この悩みはモンゴル人たちが同様に抱えていたと思っ
ていいらしい。1900年初頭から、異文化由来の概念や専門用語などをモンゴル語に反映させていくために文字改革の議論が様々になされたことから想像がつかう。

現在、モンゴル語は大きく分けてキリル文字とモンゴル文字で表記される。

そこに至るまでを概観しよう。

まずは1910年にブリヤートモンゴルにおいて、ラテン文字表記が発表されたことから文字改革は始まる。1920年代にはダゴール語をラテン字母で表記する方法が発明されたが、日本の満州国支配によって使用禁止とされた。そして、1930年にモンゴル人民共和国でラテン文字導入が決定され、1931年には「モンゴル文字ラテン化モスクワ会議」において、モンゴル語のラテン文字化が公式に決定されたが、その後、ソ連の大粛正時代を経て、まずブリヤート地域で1939年にキリル文字化が正式決定された。

次いで、モンゴル人民共和国(当時)で1941年にモンゴル語の表記がキリル文字になった。これはモスクワの意向(ソビエトによるモンゴル支配を視野に入れた政策)によって押し付けられたと言われもするが、ロシア経由で積極的に様々な概念をモンゴル語訳し、かつ先進的な専門用語を導入し、徹底した教育システムをもって、社会主義時代におけるモンゴル人民共和国(当時)の識字率は98%に至った。この数字は日本に次ぐハイレベルであり、同時期の韓国、中国よりも遙かに高い水準を誇る。残念ながら、社会主義崩壊後の社会混乱期を迎え、教育水準が下がったときもあったが、1993年頃からは以前の水準に戻りつつあると言われる。単純に言ってモンゴル人の教育レベルはアジア屈指の高さを誇り、現在に至っている。

南モンゴル地域の文字改革

一方、モンゴル文字を現代に至るまで利用している南モンゴル地域(内モンゴル自治区)ではどうだろうか？一説には1905年に南モンゴル地域東部のハラチン右旗王府でラテン文字によるモンゴル語新聞が発行されたと言われている。ただし、新聞の所在が確認されておらず、真偽のほどは不明だ。モンゴル人民共和国でキリル文字化が進む中、1944年頃に日本に留学していたモンゴル人たちの間でモンゴル文字のラテン文字化の議論が行われていたが、1945年以降は、まずはモンゴル語表記を口語発音に近い表記にすること、すなわち言文一致をモンゴル語教育に導入しようという流れが生まれた。これ以降、モンゴル語表記はそれまでとどうやら異なっているようだ。



-死ぬまであり続ける、祖先の土地-
-離れること決してなき、ふるさと-

土地は誰のモノでもないと思えるモンゴル人であるが、自分たちが生まれた故郷への思いはとても強い。言葉と故郷...モンゴル人がもっと大切に思うものふたつが奪われようとしているのだ。



シリンホトにあるモンゴル博物館。
モンゴル人やモンゴル文化、モンゴルの歴史を尊重し、大切にしていますと一見思わせるような立派な作りと内容だが、だまされてはいけない。モンゴル文化や歴史、モンゴル人までをも、「中国史」「中国文化」「中国人」の一部であったと位置づけている。「チンギスハーンはモンゴル族だけど、中国人だった」と理解させるための巨大な装置が、中国の博物館だ。

そして、日本による南モンゴル支配が終了した後、内モンゴル自治政府統治下において、キリル文字を学習することが盛んに行われるようになった。この新文字(キリル文字)学習は1957年半ばまで活発に進められた。この過程において、1954年9月に國務院副総理に任命されたオランフー(内蒙古自治区党委第一書記、自治区人民委員会主席、内モンゴル軍区司令員兼政治委員、内蒙古大学学長、党中央華北局第二書記、内蒙古自治区政治協商会議主席、国家民族事務委員会主任)は「一方ではモンゴル人民共和国の進んだ文化を学び、他方では毛沢東思想をモンゴル人民共和国に宣伝するために」とキリル文字の採用を考えていた。1957年には新疆ウイグル自治区でもウイグル語、カザフ語、モンゴル語、キルギス語、シベ語にキリル文字導入を決定するに至っている。

中国共産党政府の裏切り

1949年までの中国共産党政府の公式な立場は、「民族自決権の承認・自由意志による中華共和国連邦の建設」であったが、1952年の「自治要綱」でこれを覆し、民族自治の権利として、

民族の文字・言語使用権

一定の財産管理権

国家の統一的軍事制度に基づく公安部隊、民兵の組織兼

単行法規の制定権

のみと、民族自決権を大幅に減らすものであった。そして、中華人民共和国憲法では、「中華人民共和国は多民族統一国家であり」「各民族自治地方はすべて中華人民共和国の不可分の一部である」と、勝手に宣言するに至ったのである。つまり、「民族自決」を約束して利用するだけ利用した後は、約束した「自決権」はおろか、「自治権」すら矮小化してしまったのである。

しかし、中国共産党政府は内モンゴル自治区に対して、初期の頃は穏歩前進といった現実路線で、モンゴル・漢民族間の対立感情に注意を払っていた。牧畜地帯では反宗教運動や家畜の再分配(つまりは取り上げて再分配)をせず、生産力増大、技術改善を推進し、また、モンゴル人民共和国との往来も積極的に行い、上に述べてきたようにキリル文字化やモンゴル語による出版事業が奨励するなど、モンゴル人たちは「中華人民共和国国民として、民族文化を維持していける」ような気分させていたのである。

実は、中国政府は1948年から1951年にかけてチベット併合とい

う暴挙を行っている。チベット人が最も大切とする宗教を奪い、併合したのだ。これを中国は、宗教という古い慣習に捕らわれているチベット人達を解放したと、実にふざけた姿勢を正当化していまだに不法占拠を続けている。

さて、これが終わってすぐに、「自治要項」の内容を変えたのであるから、チベットで何が起きたのかを見たモンゴル人に対して、同様の文化侵略を行うことは、さすがに避けたのではないかと、私は思うのだ。であるから、「君たちの文化は守りますよ」という姿勢を、とりあえず見せたのが、この時代、1957年頃までだったのだろう。

ところが、1958年から反右派闘争がはじまり、地方民族主義は激しい攻撃を受けるようになった。モンゴル古来の文化、習慣が攻撃の対象とされ、要職、幹部の共産主義化が強行されたが、これはすなわち事実上の漢民族化であった。遊牧民の集団化が進められ、1959年には人民公社化が完了している。そして、更には、民族融論が説かれ、大量の漢民族が少数民族地帯に移住し、土地を奪い、職を奪う、そして婚姻などを通して母語の漢語化などが推し進められることとなった。漢民族は、いかにせん数だけは多く、大勢で押し寄せてきては数の力で思い通りにするというやり方で異文化、異民族を駆逐してきたのであり、このやり方、考え方は現代においても全く変わっていない。「中華」に取り込むことが、異文化、異民族の当事者にも幸せをもたらすという、実に迷惑な信念を持って、国策として、世界の「中華化」を目指しているのである。

この流れの中で、1957年7、8月の「全国民族工作座談会」において、周恩来は各民族語の文字記号の統一を指示し、同年11月には「漢語拼音法案」が採択されるにいたった。つまり、それまでモンゴル人たちの自由意志に委ねていた文字改革を一方的にストップさせたのである。その後、中国共産党政府は1958年3月に、少数民族言語政策を変更し、「新文字の普及を停止し、古い文字の学習と使用を強化することに関する決議」を發布した。そして、少数民族の文字改革は「漢語拼音法案」によるものとし、キリル文字の導入案は廃止された。

こうしてみると、伝統的とされる縦書きのモンゴル文字の維持、および発展を目指すかのようにも見えるのだが、私にはそうは思えない。そもそも、モンゴル人自身が縦書きモンゴル文字で



フフホトにある内モンゴル博物館。立派な作りの上に入場無料、写真撮影可という大盤振る舞いだ。それらはすべて中国共産党政府がねつ造する歴史や民族関係を広く知らしめるためである。民族文化を尊重していると喧伝するための広告に過ぎない。また、モンゴル人たちに対するアピールでもある。しかし、それらは政府が用意した箱庭の中で許されるだけの自由や権利にすぎない。モンゴル人たちはその行動自体が監視の対象となっているのだ。

は不便だと改革をめざしたのに、たとえ改良せよと言ったとて、「不便な文字」を残させたと私はみる。

モンゴル文字の言文一致化の問題は、モンゴル文字の上で行われることとなり、現在のモンゴル文字表記は一昔前の表記とは異なると言われており、伝統的な様式、特徴を維持しつつ、現代社会における、否、国際社会における様々な現場で縦書きモンゴル文字は利用できるに至っている。コンピューター処理において非常に不利な特徴を持ちながらも、それでも利用できる環境を整え、むしろモンゴル文化を代表するに足る特徴を持った文字として確立していると私には思うのだが、ここにきて、「モンゴル文字、モンゴル語は先進科学技術や概念を運用するのに適さない遅れた文字、言語」であると中国政府は言い出した、モンゴル語による教育の廃止という暴挙に出たのである。この顛末については、後述することとし、ここではもう少し、南モンゴル地域に起きた悲劇について目を向けることとしよう。

ジョノサイドの時代を経て、安定支配へ

そして、1966年から、いよいよ、あの悪名高き文化大革命が始まるのだ。1969年までの間、モンゴル語教育は停止され、多数の文化財が破壊された。中国共産党政府にとって好ましくないものすべてを消し去ろうとしたのが文化大革命だ。このように歴史を知るものを抹殺することで、自分たちに都合よく上書きするのが中国共産党政府のやり方である。

残念ながら、あまり知られていないことだが、文革時に南モンゴル地域に暮らしていた150万人近くのモンゴル人のうち、34万6千人が不当な嫌疑の元、逮捕され、そのうち27900人が拷問を受けて殺害された。逮捕された人々のうち12万人に身体障害が残され、その障害が元となってなくなった人々を含めると死者数は10万人以上とも言われている。30万人が犠牲になったとの調査もある。しかし、このジョノサイドは完全に中国の歴史から葬り去られてしまっている。楊海英氏の調査、著作以外でこの事件を真正面から記録した著作を私は知らない。多くの人に読んでいただき、知っていただきたい歴史の事実がここにある。

ところで文革当時、旧満州帝国や旧蒙古自治邦政府において日本との関わりがあり、当時、もっとも先進的な知識を日本で学び身につけてきた知識人たちの多くが、日本のスパイなどという

“いちやもん”をつけられて、殺されてしまったと私は南モンゴル留学中に耳にした。詳細は後述することにする。

とにかく、モンゴル人の中の知識人や指導者としての資質を持つ人々をことごとく粛正し、その恐怖を植え付けることで中国共産党政府は南モンゴル地域の支配を確実なものとしていった。この時、自治区成立後、一貫して自治区主席、軍区司令官、党第一書記として実権を握っていたオランフーは毛沢東の民族政策に反対したなど100の罪状をかぶせられて失脚させられている。オランフーしてみれば、高度な民族自治の約束があったからこそ、モンゴル民族の独立的立場を得られると中国共産党を信じ、対日戦線に参加し、かつ大いに成果をあげ、さらには毛沢東思想を北のモンゴル人民共和国に伝えるのだと言ってはモンゴル文字改革においてキリル文字を推し進めたにもかかわらず、高度な民族自治は反故にされ、文字改革も潰され、終いには100の罪状をかぶせられることになったのだ。中国共産党との約束がいかに無意味なモノであるか、南モンゴル地域が受けた仕打ちをみれば一目瞭然と言っていだろう。「なんとか会議」とやらの、いつでも都合よく一方的にすべてを塗り替えることができるのが漢民族流であることを知っておかねば、簡単にだまされることになるのである。「まさか、そんなことは…。だって約束したし」というのは全く通じないのだ。そのくせ、外交の場では、「約束を守るべきだ」などと、ふざけたことを平気で言うのが中国流だ。

そして、1970年から1979年にかけて、内蒙古自治区は各軍区に分割された。つまり、軍事的にまとまる可能性を潰しておいたのである。細かく分けておけば、不満分子のまとまりも小さく済み、また未然に発覚もしやすくなり、かつ、潰すときに簡単なのだ。

この時点で、総人口の85%が漢民族、わずか13%がモンゴル民族という人口比となり、南モンゴル地域は、中華人民共和国内において、“自治”など事実上無縁であるにも関わらず、“内モンゴル自治区”という名の、漢民族による中国共産党政府によって支配されることとなってしまったのだ。

天安門事件の陰で

さて、ここからは私が直接見聞きした内モンゴルでの出来事を記しておこう。



私が南モンゴル地域の中心フフホト(青い街を意味するモンゴル語。漢語では“呼和浩特”と書くが、原語であるモンゴル語の意味を訳すことなく、ただ音を当てはめただけの書き方である。そして、結果、原語ともかけ離れた発音がされるにいたり、その言葉、さらには関わる情報のすべてを消し去るのが漢語化する時の姿勢である。)に留学したのは1991年の1月だった。先立つこと1989年の12月頃に、東京外国語大学の蓮見教授に「シャーマン研究でモンゴルに行きたいのです」と相談したところ、教授は「内モンゴルの先生でシャーマニズムに関して本を出しているから」と、お知り合いの先生(内モンゴル師範大学教授)を紹介してくださいることになった。大学側に連絡をいれてくださったのだが、返事がない…。それもそのはずで1989年には“六四天安門事件”が起きており、中国共産党政府によって、大学関係者たちに対して様々な規制、監視、弾圧がされていたのであった。

少し話を戻そう。

1989年の6月4日に、北京の天安門に言論の自由を求め集まった大学生、知識人、学者、研究者を武力排除したのが“天安門事件”と呼ばれる。この真偽についてはネットではいろいろ書かれているのだが、今現在、ウイグル人たちに対して行われている様々な虐待行為を認めない、また、無かったように情報を操作しようとする躍起になっている様子から推して知るべきだろうと思う。このように書くと、少々、信憑性に欠ける書き方になってしまうので不本意ではあるが、真実に対して不誠実であるのは中国の伝統であることは歴史が物語っているのだ。

さて、この事件直後のことだ。私は偶然、蓮見教授の部屋にいたのだが、部屋の電話が鳴った。先生は受話器を取ってしばらくモンゴル語で話をしておられた。当時、私はモンゴル語を全く理解できなかったのだが、先生は受話器を置いてから次のような話をした。

「いまの電話。〇〇〇君のお母様だったよ。もう少ししたら〇〇〇君は留学期間が終わって帰国するんだけどね、お母様が言うには、いま、息子が日本から帰ってきたら、ランチされて殺されるから、なんとか滞在期間を延ばしてほしいっていうんだよ」

続けて、

「天安門に集まった人々の多くは漢民族なのだが、鄧小平は『漢民族の血を漢民族に流させるわけに行かない』と、鎮圧部隊

としてモンゴル人、ウイグル人などの民族部隊が投入したのだよ。だから、漢民族が多い地域、つまり内モンゴル地域とかね、そこでは、漢民族らに『おまえらは同胞の血を流した』と報復ランチがされているらしい。日本には流れてこない情報だけどね。さっきのお母さんは、『今、家の前で木につるされて暴行されている若者がいる。うちの息子もきつと殺される』って」と仰った。当時、インターネットなどない時代、テレビに流れてこない(この頃は、私もまだマスコミのジャーナリズムを信じていた)情報の存在自体がとても恐ろしいもののように感じられた。

南モンゴルでみた現実

そんな天安門事件の後なのだ。大学側も外国人をおいそれと受け入れられないということだったのではないだろうか? 何度か蓮見教授に連絡が来てないか? を訊ねてはみたのだが、一向に埒があかないまま、ほぼ丸一年が過ぎようとした1990年12月初頭に一通の手紙が届いた。受け入れ許可の通知と来校日の連絡をしるということ、そして学費、寮費の詳細が記されていた。というわけで、今思えば、ちょうど、モンゴル国で民主化運動がピークを迎え、一党独裁を放棄、複数政党制、自由主義経済への移行などが流血無くして行われる、まさにその時、私は内モンゴルへ行く準備に忙しかつたことになる。

さて、大慌てで、件の内モンゴル自治区の区都フフホトに行った。留学記ではないので、あまり詳細を書くのは控えることにするが、内モンゴル師範大学は正月を控えた長期休暇に入っていて、来ると言われていた迎えは駅に来ないし、自力でたどり着いた大学も閑散としていて、どこに行ったらいいかわからず北門で手当たり次第、道行く人を捕まえては書類を見せて、困っている風をアピールしたのが、留学初日だった。そうこうしていたら、「日本人の方ですか?」と日本語で声をかけ、構内の教員住宅に私を招き入れ、大学事務員と連絡を取ってくださったモンゴル人の方に出会えた。流ちょうな日本語で、訊くと学生時代に勉強したのだという。日本留学経験はないにも関わらず、ここまで話せるのか? と大いに驚かされた。しかし、驚いたのは、教員住宅だった。この方は助教授の肩書きを持つ方だった。家族は5人。内モンゴル師範大学とえば、内モンゴル自治区において3本の指に入るだろう有名大学の助教授のご自宅が、トイレ、炊事場は共



内モンゴル師範大学の教職員居住区に作られた柵。居住区全体が柵で囲まれているのみならず、建物毎でも囲まれている。

この居住区は大学北門すぐのところにあるが、居住区入り口横には中国公安の巨大な建物がそびえ立ち、装甲車、関係車両がまるで出入りする人々を威嚇するかのようになっている。多くを語る必要はあるまい。日常的にこのようにして、モンゴル人たちに無言で圧力をかけ続け、敵対心をそぐのが目的なのだ。居住者を守るために公安が存在しているのではない。ちなみに、北門にあったモンゴル書店は潰されてずいぶんになる。



内モンゴル師範大学の教職員居住区の周囲はぐるりと柵で囲まれている。泥棒対策ではない。デモなどが起きたときに封じこめることが目的である。1991年の私の留学当時にはなかった。

同、トイレに扉は無し(これはこれでこの文化、習慣ということなのかもしれないが)、風呂は構内の銭湯のみ。部屋は10畳くらいの一間だ。これが大学助教授の家とは思いがたかったのだ。こういう部屋が廊下を挟んで向かい合って、2階建ての建物の中に、部屋数が20部屋で20世帯、各部屋5〜8人くらいが暮らしていた。つまり、1世帯、大部屋一部屋で暮らしているのだ。ある意味、それでも研究活動というのにはできるんだという発見もあったのだが、大学教員の経済状況の悪さを目の当たりにし、天安門事件で彼らが求めたものがなんだったのかは一目して理解できた。

しばらくすると、私を受け入れてくれる教授のご自宅に案内された。大学北門を出て道路を渡った一区画が4階建ての教員アパートになっていた。教授クラスのご家族が住んでいるエリアのようだ。案内された教授の家はというと、客間、台所、寝室、仕事部屋、トイレを備えていた。ただ、この方の家の間取りは他の方々とは違って少々大きく、部屋数も多いようだった。学部主任でもあったからかもしれない。

留学中に知り合った研究者、学生たちの話をまとめるとこうだ。

天安門事件のとき、大学構内でもデモが起きたらしい。たくさん教育関係者が声を上げたという。そのほとんどがモンゴル人だった。しかし、事件が流血をもって終わったとき、デモに参加していた人々は次々と大学当局や公安に呼び出され、自己批判文を書かされたり、人によっては、地方へ労役に出されるなどしたそう。学内や街のあちこちにカメラが設置されていて、参加者たちは割り出されたという。教員住宅や学生寮のあちこちには盗聴器もあるという。教員たちは減給されるなどの処分を受けた人もいた。

これらの話をするとき、人々はとても慎重だった。当然だ。盗聴器があれば、密告者も多い。おいそれとすることを思った通りに話すことができないのである。

当時、友人たちがよく口にしたのが、「仕方ない」という言葉だった。様々なことをすでに諦めている様子を感じられ、「あと50年もすればモンゴル語を話す人はなくなるよ。もう、仕方ないね」と聞かされるたびに、私は怒りがこみ上げたものだった。

私は大学の学生寮内に併設された招待所(簡易宿泊所)の4人部屋をあてがわれ、そこで半年間滞在することとなった。

フフホトという街はというと、バス停の路線図も、店の看板も、なんもかんもあちこちがモンゴル文字表記されていて、自治区というだけあってモンゴル人たちが主人公なのだろうなと思わせる。まだ、中国の歴史の真実や漢民族とモンゴル人の関係などについて全く知らず、高校時代に大いに影響を受けたさだまさしの著作などで読み慣れたイメージ以外に何も知らなかったのだが、滞在日を重ねるごとに、違和感を感じるようになった。

まず、街を歩いていて、モンゴル服を着ている人はいない。まったくいない。滞在中、お正月を迎えたのだが、そのときに晴れ着として来ている人をちょろっと見かけたが、それでも、「モンゴル人が主人公の自治区」とは思えなかった。先生や友人にモンゴル服を持っているか?と聞くと、持っている、ほぼ皆答えた。が、その誰もが普段は着ないという。理由は特に言わなかったのだが、なんとなく察したので、試しに、私自身で、平日に街中をモンゴル服を着て歩き回って、店に買い物に行ってみることにした。大学構内を歩いていると、特に何を感じることもなかったのだが、大学を出ると痛いくらいに視線を浴びることとなった。視線の多くは、むき出しの敵意だった。直接何を言ってきたりするわけではなかったが、それらの目は、明らかに嫌悪感を示していた。私が来ていたのはシルクの薄手のデール(テルリグ)だったので、田舎から出てきたモンゴル人という風ではなかったと思うのだが、そのままある食料品店に入ってみると、店員は私を一瞥するや、カウンターの端、私がいるところから遠ざかった。私が下手くそな漢語で、「これいくら?」と聞いても、こちらを見もしないで聞こえないふりをした。少し大きな声を出してみたが、変わらず。日本語で「これいくらってきいているんだよ。きこえているんだろ!」と怒鳴ったら、モンゴル人ではないとわかったのか、どうしたわけか、ニコニコ作り笑いをしながら慌てて走っていった。当時、中国のどこにいても、外国人に対しては、少々へりくだった態度をとるように思えていたが、まさにそれだった。友人に言うのと、「漢語が下手だと、馬鹿にされるからね」と教えてもらった。

漢語が下手だと馬鹿にされる…これがこの土地のすべてを物語っているように私には思える。私と漢語は相性が悪いのか、どうもうまく発音ができない。あ、いや、他の言語も(日本語も)そう発音が美しいとは思いたいのだが、漢語は特に苦手だ。



モンゴルの草原にゲルのハナの様子がつき、
モンゴルの草原が割れた茶碗の欠片で覆われるとき、
我、チンギスハーン、蘇り、敵を駆逐せん！
と、チンギスハーンは言ったとか、言わなかったとか…。
草原に縦横無尽に書いた轍、割れた陶器の茶碗、どちら
も中国文化を象徴している。
いまや、中国によるモンゴル地域への経済および文化侵略
はとどまることを知らず、いよいよ、モンゴル人の存在を
すらすら脅かすに至っている。
中国共産党政府が示す幸せの指標は経済発展を数
値で表したモノばかりで、数値に表せない民族感情はす
べてないがしろにされてきたのである。

留学当時、とあるモンゴル人が私がいった「シエ、シエ」(謝々)というのを聞いて、爆笑しながら、「おまえ、ちゃんと発音しろよ」と言ったことがあった。そのとき、一緒にいた別のモンゴル人が烈火のごとく怒り、「おまえ、歴史学部の学生でありながら、それを笑っていいと思ってるのか！」と怒鳴りつけたのが忘れられない。後で彼に聞くに、「文革当時、紅衛兵などが、列車の乗客たちに『謝々』と言わせ、発音が下手なモンゴル人に対して『“ありがとう”すら言えないのは人ではない。家畜だ』とって乱暴を働いたんだよ。まだ当時、モンゴル人たちは今ほどに漢語になれてないからね。かなりの人たちがひどい目にあっていたんだ。それと同じことをモンゴル人がするなんて言語道断だ！」と興奮気味に話してくれたのだった。そんな話を聞かされた私は、たとえ、中国滞在中に漢語ができた方が便利だと言われても、「絶対、勉強してやらない」と思ったのだった。旅先や車中などで、漢民族相手に話をするようになったときは、筆談で済ますようにしたのだが、「なんでモンゴル語なんて不便な言葉を勉強しに来たのだ？漢語の勉強をしろよ」とかなり強硬に主張する、通じがりの漢民族は多かったものだ。そして、恥を忍んで片言の漢語を話したとしても、変だと言って馬鹿にして、笑い飛ばすのだ。すべての現場でそうだったわけではないのだが、「田舎者」とか「変な少数民族」という扱いをされた。いずれにせよ、自分とは異なる文化、言語を持つものを受け入れようという姿勢を見ることができないのが私の経験であった。

この姿勢に対して、モンゴル人は少々違う。前述したように、自分たちの話すモンゴル語とイントネーションや発音が違ったとしても、きっとどこかのモンゴル人だろうって思ってくれる。また、1992年に列車でモンゴル国に入国する際、パスポートをチェックしたとき、モンゴル人が、私がモンゴル語を話すのを聞くと、「ん？モンゴル語がわかるのか！そうかそうか、よしよし」とほぼノーチェックになったりと、いや、これはこれで本当にいいのかわからないが、日本人が中途半端な南モンゴル語発音で話したとしても、モンゴル語として認めてくれた。ただし、後になってわかったことだが、北モンゴル(モンゴル国)の人々が南モンゴルの人々のモンゴル語を馬鹿にするというのは多く観られるようだ。しかし、この場合は、「漢民族化しやがって」という文脈で言われることが多いように思われる。思うに同族間において

は、実は、確執があるのは当然のようだ。しかし、異民族が関わってくるときに、モンゴル人は敷居を低く迎え入れるが漢民族は上から目線であたり自分たち側に立つのが当然であるという態度になると私は経験している。

さて、少々、個人的な狭い経験に依拠した話になりすぎた。話を南モンゴルの1990年代前半に戻そう。

社会主義が崩壊し、複数政党制の民主国家に生まれ変わったモンゴル国は、南モンゴルの人々にとって憧れの土地であった。モンゴル語で話し、モンゴル服を着て、モンゴルらしい生活を自由にできること、こんな当たり前のことが、憧れになっていくことが彼らの状況を如実に表している。当時、モンゴル国から入ってきていた“6:45”というカセットテープは大学生たちの誰もが持っていて、収録曲を誰もが歌ったものだった。“マナイド イレーレイ”(うちにおいで)という歌は、モンゴル国から呼ばれているかのような気持ちにさせていたようであったし、“エヘ ノタグ”(母なるふるさと)は失われつつあるモンゴル人たちの土地への思いが込められ、“ウランバートルイン ウデシ”(ウランバートルの夕べ)は自由を得た若者たちの平安な、そして希望に満ちた未来を願って、歌われていたのだと思う。

1990年初頭、彼らが特別なときに歌う歌にガダーメーレンなる歌があった。

南より飛来する 赤き雁たちよ
 広大な黄河のほとりに 舞い降りることなく、
 去って行ってしまうのか
 ガダーメーレンが心痛めたのは
 広大な故郷をもつモンゴル人たちの
 生きる場所のことだった
 北より飛来する 熱き雁たちよ
 広大な黄河のほとりに 舞い降りることなく、
 去って行ってしまうのか……

この歌は20世紀初頭に押し寄せてきた漢民族入植者らによる開墾から草原を守ろうとした男を偲び、たたえる歌だ。91年の私の留学時には、この歌をおおっぴらに歌うことができないとされていた。モンゴル人と漢民族の対立を歌うというのが理由らしく

た。モンゴル人たちにしてみれば、清朝帝国末期に始まった漢民族の侵入に、天安門事件後に先鋭化を始めたモンゴル文化への侵略を重ね合わせ、それへの抵抗の象徴としてガダーメーレンが歌われていたのだが、中国当局はこれを決して認めなかったのである。90年代初頭の南モンゴルの若者たちは、酒を飲んでは、この歌を歌い、歌い終わるや、すぐにその場を離れる…というのが常だったようで、とある食堂にいたモンゴル若者たちが去った直後に中国公安らしき連中がわらわらと入ってきたというのを何度か目撃したことがある。

ところが、それが数年たった頃、おおっぴらに歌って善いと言うことになっていった。訊くと、「解釈が変わったんだよ。民族間の闘争ではなくて、階級闘争を歌った歌ということになってき…」と言う。そしてガダーメーレンは漢語訳されて広く出回り、またプロモーションビデオでは、日本軍に抵抗するガダーメーレンが描かれるようになっていった。同時に、モンゴル語オリジナルを収録したCDは皆無だった。PVの冒頭でモンゴル語オリジナル歌詞が多少歌われても、映像は対日抗争の様子だ。ガダーメーレンは漢人の入植から草原を守ろうとしたモンゴルの英雄だったのに、日本から祖国を守った中国人の英雄として位置づけられ、喧伝されるようになっていたのである。これが、中国式なのだ。この先、モンゴル語がわかるものがいなくなったら、当然、PV冒頭部分のモンゴル語はまったく意味をなさないものとなって、完全にねつ造された歴史だけが歌い継がれていくことになるのである。

むろん、今現在においてはモンゴル語話者はまだまだ存在しているのだが、この例のように文化、歴史をねじ曲げるやり方はあちらこちらで行われているのだ。

奪われる歴史

私の南モンゴル滞在はわずか半年のものであったにも関わらず、モンゴル人たちが置かれている状況を肌で感じるには十分すぎる時間であった。街のあちらこちらに大きな文字で書かれた「民族大団結」というスローガンは、少数民族を安心させるための方便にすぎないことを私は知った。

留学中、歴史学部の学生との親交が深まったのだが、教壇に立つようになった彼らから聞かされたことがある。

「大学受験科目から民族史が無くなったんだ。だから、学生たちは、モンゴルの歴史を知る必要が無くなったんだ。チンギスハーンはモンゴル民族ではなくて、中国人の祖先だということになってしまっただ」

そして、まさにその通りとなった。中国共産党政府は各種博物館の入り口に、「中国は古来より多民族共生国家であり…」という嘘を平気で書くようになっていった。黄河流域を様々な民族たちが奪い合った歴史であり、それぞれがそれぞれに独立した国家であった。その歴史をすべて、中国の歴史と位置づけて、すべて「内紛」として位置づけるのだ。従って、大昔から、いまの中華人民共和国の版図があって、チンギスハーンもその中で活躍したというのである。

モンゴル民族の伝統楽器である馬頭琴もまた、同様の解釈で、中国の伝統楽器の一つとしてユネスコに登録されるに至っている。今現在の中華人民共和国の版図内で支配されているすべての民族の個別の歴史は、ことごとく中国の歴史の一部として位置づけられるのだ。

次になにを奪われるのか？

モンゴル人たちは土地を奪われた。遊牧文化を奪われた。歴史を奪われた…。そして、いよいよ言語を奪われる局面を迎えている。言語が残っていれば、文化を再生させることはある程度可能であろう。しかし、これが失われたら、おしまいなのだ。モンゴル民族の血だけが残るのだが、これが消え去るのも時間の問題と言うことになる。ウイグル地域では漢民族と結婚すると生活の様々な局面で優遇されるようになっていった。いずれ血も失われるだろう。このようにして、すべてを中国、中華に飲み込むことが漢民族の願いだという。

そして、この欲望は決してとどまることを知らない。文化、習慣、歴史、おおよそ自分たちと異なるものすべてを認めない姿勢

は、ただひたすらに経済的な豊かさを享受することだけを追い求めるからだ。すでにその矛先は世界に向けられている。

中国共産党政府は、南モンゴルとモンゴル国を分断させておくことをよしとし、南モンゴルで何かことを起こすとき、モンゴル国に経済的な支援を行い、「内政干渉するな」と釘をさす。残念ながら、モンゴル国政府はそれを飲み続けてきた。南モンゴルで涙や血が流されることでモンゴル国はその独立を中国に認めてもらうかのように…。

しかし、中国の本当の狙いがどこにあるかをいずれ知るときが来るだろう。中国共産党政府の理解では、中華人民共和国の領土は「清朝帝国時代の版図をもってそれとする」のであるから。その版図には現在のモンゴル国はすべて入っている。そう、南モンゴルの完全なる漢化というのはモンゴル国侵略の外堀を埋めることに他ならないのである。そして、内堀もまた経済援助や賄賂でかなり埋まっていることも忘れてはならない。また、すでに草原を買いあさっている中国企業やその手先がたくさんいることは、過去のしやがぁにも記したとおりだ。

最後に、コロナについて書き残しておこう。モンゴル国では、中国からワクチンが「提供」された。6月に行われる選挙前にワクチン接種を済ませようとしていた。聞くとところによると、一回目は無料で接種できたそうだが、二回目は有料なのだそう。中国が主張する「中国はワクチンを提供して」という言葉にだまされてはいけない。「提供」という言葉の実際は、「安く売ってあげている」ことにすぎないのである。日本、欧米が行っている「無償提供」よりも遙かに少ない数が「無償提供」にすぎず(全体で約5億回といわれるうちの1000万回ちょい)、ほとんどは安価に売りつけているのである。ありがたがる必要など全くないのだ。そして、モンゴルでは二回の接種後に行われた選挙後、感染爆発を起こしているのである。私は、こういうのをみるに、この一連の「援助」というのは、実際は「侵略」だと思えない。

南モンゴルで起きている文化虐殺の先にある民族滅殺は、明日はモンゴル、そしてあさっては…と周辺諸国、諸民族は知るべきだと思う。中華人民共和国は平和を求めるとよく口にするが、「平和」の意味は我々が知るそれとは大きく異なる。たとえば、今、同じ意味で言っていたとしても、ある日、突然、連中の都合で解釈が変わる性質のものであることも肝に銘じておいていただきたい。法治国家でなく、人治国家である以上、国として一貫した態度は望むべくもなく、国家間の条約ですら遵守される保証はないのだ。さらに言えば、民間交流の最先端で友好を語る人々が、彼らの本心に意思に反して、やむを得ない状況の中で、突然、我々を敵とし、攻撃してこないと言い切るには不安要素がとて多いというのが、中華人民共和国の歴史観、国家観、文化観、価値観から導き出される現実では無いだろうか？

今記事は、私、西村の私見に寄る部分また感情的表現が多くなっていること、ご理解、ご承知おきいただきたい。文責は西村個人にすべてあることも併せて明記させていただきたい。

文責：西村幹也

チンギスハーンが行軍中に滞在したというトゴボラグ周辺。当時からこのような茶色い大地だったのか？それとも、緑に覆われていたのだろうか？いま、ここは…すっかり中国の街になってしまった。



楊海英氏に訊く

南モンゴルの今



対談は <https://youtu.be/2AX6RMeE-j4> にて公開しています

楊さん：内モンゴルで保護運動が始まってから、ちょうど今頃なんですけど、7月24日から署名サイトを始めたんですけど、その直後に、もう私のwikipediaがさんざん書き直しされて…。もう腹たって私が署名活動を始めたので、私のウィキペディアを書き直しする人は、私に悪意を持つ人でとこう宣言したんですよ。そしたらいじらなくなって。多分日本人の。五毛(ゴモウ)でしょうけど、最近三毛に下がったらしいんですけど。

[補足:中国共産党政府から小銭をもらって、反政府的発言をする人物に対してインターネット上で攻撃をする人々のことを“五毛”と言う。中国の通貨単位“毛(マオ)”は2021年8月現在で約1.6円。発言一件あたり約8円の報酬を得て、言論封殺のために中傷的コメントなどを送りつける人々のこと。転じて中国共産党政府に媚びを売る人物のことを揶揄するという時もある。香港の俳優ジャッキーチェンがそのように揶揄された時期もあった。]

西村：三毛でもやる奴がいるわけですね？

楊さん：いるいる、いっぱいいますよ。で、そういう奴がね、大学にまで電話かけてきて、「なんで反中国的な行動をとるんですか？中国は素晴らしい国だ」とか言い出して…。それで一時はもううちの大学の交換もかわいそうに…。電話どんだんかかってくるから、いいから私の直接直通番号にかけられるようにしといてくださいというふうにして、日本人五毛対策をしてきたんですよ。やりにくいのは日本人五毛ですよ。

西村：それ、本当に日本人なんですか？

楊さん：日本人です。あの、しかも大体年配の人が多いです。

西村：ああ、シルクロード世代の方じゃないですか？

楊さん：まあ、だいたいあの世代ですよ。中国が美しく良い人、そう思ってる人いるらしいですよ。

西村：そうなんですよね。僕の高校の同級生のお父さんなんですけどね。僕が内モンゴルの留学から帰ってきたときに、そのお父さんが、「中国の人たちはみんな優しくて」みたいなこと言ってるから、「いつの時代の話してるんですか？そんなじゃなかったですよ」とか言ったんですよ。そうしたら、その人も「文革前はすごくやり取りがあって、いい感じであったのが、文革を挟んでなんかおかしくなってきたような気がするんだ」みたいなこともいつてたりもしましたね。まあ、いずれにせよ、まあいまは、良い、良いと言って、両手を上げて賞賛するのが難しいのは現実じゃないかなと。僕は思いますね。

楊さん：やあ、でも、あれですよ。最近、またちょっと彼らも頑張って挽回しようとしているんですよ。2,3日前ですかね。30日、今日は31ですよ。はい、昨日だったと思うんですけど、日本の素晴らしい前総理大臣鳩山さんを迎えて国会でウイグルジェノサイドは99%がフェイクニュースだという、そういうシンポジウムが開かれて、それで中国は素晴らしい、職業訓練センターやってるよとか。そういうのがね、堂々とやってるわけですよ。それに

楊海英(モンゴル名:オーノス チョクト、日本名:大野旭、中国名:ヤン・ハイイン、ようかいえい 楊海英はペンネーム):モンゴル人。1964年、内モンゴル自治区オールドス生まれ、2000年日本へ帰化。静岡大学人部学部教授。文化人類学・歴史人類学者。文学博士。中央ユーラシア各地で調査。中国政府の迫害政策に対する抗議活動やモンゴル文化の保護運動を目的とした「世界モンゴル人連盟」を2020年に設立、理事長に就任。著書に『モンゴル騎兵の現代史』、『墓標なき草原』、『日本陸軍とモンゴル』、『モンゴル人の中国革命』、『モンゴルとイスラーム的中国』、『世界を不幸にする植民地国家 - 中国』、『内モンゴル紛争 - 危機の民族地政学』、『モンゴルの仏教寺院』、『紅衛兵とモンゴル人大虐殺』等多数。

鳩山前総理大臣。それから中国の孔大使とか、それから東洋学園大学のなんとかケイエイ(朱建榮)とか。彼らがでてきてやってるわけですよ。元気ですよ、彼らは。ドイツは、そのホロコーストの後にああいう風にホロコーストを称賛していた奴は全部人道法廷に立たされているので、まあ将来え、えっと慶応大学のおおにしひろしとか、あ、名前出しちゃいました…。

西村: あっはっはっは。いいですよ。どんどん行きましょうよ。

楊さん: 朱建榮とかね、孔大使とか。前総理大臣は孔子平和賞もらいたらしいけど、それをもらう前に、人道法廷に立たされるんじゃないかな。日本人はあいつをね売国奴として裁判にかけるべき。

西村: あははは、最初から、過激な発言が出てきている。

楊さん: あ、いや、すみません。

西村: いえ、いや、あのお、やっぱりですね、言うべきことは言うべきだと思いますね。本当にあの影響力のある人が、そう、いま、名前があがった人たちというのは、その影響力を持った上で、間違った、もしくは彼らが信じるだけの情報をただ垂れ流すわけですよ。で、多くの人達はその肩書きにひれ伏してしまうわけじゃないですか。僕みたいに肩書きなんてどうでも良いと思ってる人間は絶対にひれ伏したりしませんけれど、でもほとんどの人は肩書きにビビルわけですよ。だから、「肩書きあるけど、奴は実はね」というような話は、ぼくらはやっぱり知りたいたいですよね。わかんないですから。

楊さん: おっしゃる通りですよ。慶応大学の西村さんはね。私も知り合いで数年前にあるシンポジウムに彼も来ていて、それで僕が新疆が弾圧されているという話をしたら賛成です。賛成ですとって、賛成です以上になにもいわないんですよ。俺がいると何も言わないで俺がいないと、新疆はね、中国共産党がいくら投資して高層マンションがいくら建って、ウイグル人がどんなに幸せかという趣旨の発言してるらしいんですよ。で、同じような論文は内モンゴルに対しても書いてる奴がいて、内モンゴルは経済的によく発達して、あの鬼城が出るぐらい、鬼城ってゴース

トタウンです、私の故郷オールドスにあるんです。そう、「ゴーストタウンが出るぐらい発達してるよ」と、発展してるよと。それさらに、中国の模範的自治区うんぬんって言うんですけど。お前、現地に行ってモンゴル人の話を聞いてみろって言いたいですよ。そのマンションを誰が買って、誰が潤っているのか？例えゴーストタウンでもモンゴル人は入れないんですよ。入る資金もないし、入ったとしても。それは草原を失い、漢族に奪われて、家畜も奪われて、妻も奪われて、それで仕方なく都市に入って、酒を飲んで暮らすという。酒を飲まされて暮らすっていう、そういう日が来るわけですよ。それをもって発展したっていうのは、学者らしくないんですよ。学者ならちゃんとデータの裏に何があるかっていうのも見なきゃいけないですよ。彼は中国のデータではどれぐらい投資した？はい、これぐらいマンション買った、はい幸せっていう。

西村: 彼らの言う幸せっていうのは、あくまでもお金だけですよ。その数字だって、ボクはぜんぜん信用できない数字だとしか思えないんですよ。あのまあ、僕があのおの民博にいた時代にね、まあ名前は言わないけど、ある中国からの留学生で博士課程にいた学生さんがですよ。論文ゼミで発表したわけですよ。で、提出した表があるんですよ。縦横の数字が合わないんですよ。足し算が。これは自分が作った方ではなくて、地方のとある政府が発表している数字だと。間違っているじゃんと指摘すると、「政府は間違えませんが」ということを博士課程の課程の学生が言っちゃって、こういうこと言っちゃっていいような人たちでしょう？僕もその数字からして、そのレベルの数字からしてそんななんですよ。だから政府の発表の数字なんだとしても、ちょちょいって書き直しちゃうのがあたりまえだろうっていうような、それくらい信用できないんですよ。あそこはね。

楊さん: いや、あの、西村さんね、最近ちょっと彼らも進歩していて。昨日のシンポジウムで、中国の駐日孔大使が認めた唯一のミスは何かというと、新疆ウイグル自治区で、要するに女性の出産がコントロールされていると言われてますよね。で、あれはね。オーストラリアのあの国際戦略研究所と、アメリカの共産主義被害者博物館のゼンスさんあたりが調べているんですよ。それによると。それから、日本のあの西日本新聞の坂さんっていう

2012年撮影。オールドス市。

遊牧文化を消し去るために土地を制限し、過放牧を生み出させ、土地の荒廃を理由に遊牧を辞めさせ、土地を奪い作ったのが、これ。鬼が住む街。漢語で「鬼」は「幽霊」を意味するが、モンゴル人達を追い出して、主として居座るようになった漢民族たちは、「幽霊」ではなくて、まさに「鬼」だ。





記者が、あの中国の中国のですよ、中国のデータを分析すれば、女性が10万人、不妊手術を施されて。で、これから2,30年は人口が減る一方にされてしまったと言ってるんですよ。これ、中国のデータですよ。ところで、そのデータに対して中国の孔大使は昨日ね。それだけは、あの中国の我が中国の統計がちょっとミスってしまって。ミスってしまって、10万人の女性が子供を産めない体になる？おかしいでしょ？それだけを認めてるらしいんですよ。それだけで充分、ジェノサイドですよ。特定の民族の女性の出産をコントロールするっていうのは、国連が決めたジェノサイドの定義のひとつ。これは誰かがギャーギャー大声でいっているというわけじゃなくて、彼らのやってる行為を国際社会の定義に、国連の定義に合わせる。見事にあうんですよ。

[補足: 集団殺害罪の防止および処罰に関する条約(通称ジェノサイド条約)第二条では以下のように定義されている。
この条約では、集団殺害とは、国民的、人種的、民族的又は宗教的集団を全部又は一部破壊する意図をもって行われた次の行為のいずれをも意味する。

「集団の構成員を殺すこと」
「集団の構成員に重大な肉体的または精神的な危害を加えること」
「全部または一部の身体的破壊をもたらすよう企てられた生活条件を故意に集団に課すこと」
「集団内の出生を妨げることを意図する措置を課すこと」
「集団の子どもを他の集団に強制的に移すこと」
ちなみに日本はこの条約に未加入である。]

西村：いいわけはできないはずなんですよ。

楊さん：いいわけできないですよ。

西村：恐ろしいところだな…

さて、ところで、じゃあ、そろそろ本題の方をやって頂こうと思うんですけども、この対談の前座で、僕がそもそも今回のこれ、なんで始める気になった、やりたいと思ったのかということ話を話してたんですね。去年の南モンゴル地域でのモンゴル語教育を撤廃するという動きについて一連の流れというものをパッと見てわかるものを僕は作りたいということ。次回の58号のしゃがあでは特集するつもりなんです。今回の対談を全部文字起こしして。無料で配布するってことで。このデータもそのまま全部残して行くと言うことで。可能な限り分かりやすく、時系列にですね。いったいそもそも何が起きたのかっていうこともちょっと前ふりあたりからの流れの中で、こういう風な流れの中で、こういうことになったんです？みたいな話をちょっとまず最初に頂けますか？

楊さん：はい、ありがとうございます。

まず中国のこのこうした政策が導入された目的ですけど、目的は同化ですよ。要するにモンゴル人を完全に消して、漢族に同化すると言う目的です。で、実は前例があるんですよ。それは

2017年に新疆ウイグル自治区のあのバインゴルモンゴル族自治州とホボグサイルモンゴル族自治県、それからボルタラモンゴル族自治州でモンゴル語教育が完全に廃止されたわけですよ。その時に、当時のウイグル語も禁止されているんですよ。で、そこからウイグル人ジェノサイドが始まるんですけど、その時に、これは私にも責任があるんですけど、私はニューズウィークにまあ1本の寄稿しかしてなくて…。もう少しね、今から考えると、当時は内モンゴル、あるいは我々全員が、国際社会がね、これを問題にすべきだったんですよ。

ところがまあ、あつという間に2年間すぎて…。中国からするとこの政策はね、新疆で、彼らからすると成功しているんですよ。モンゴル語を禁止しても、新疆のモンゴル人50万人は静かだ。ウイグル人はもう押さえ込んだ。内モンゴルの人も動かなかった。モンゴル国も、はい、沈黙。プリアートもカルムイクも知らん顔をしている。ラッキーと思って内モンゴルでやろうとしたわけですね。

ところが内モンゴルは、まあ皆さんご存知のように、モンゴル語以外に他には、いま、ほとんど何も残ってないんですよ。要するに500万人と称するモンゴル人たちがモンゴル語話せるのは多分200万人ぐらいで、その200万人は若干モンゴルをしゃべってモンゴル語教育を維持して、モンゴル文化を発展させていこうと努力しているんですけど、じゃあその文化を支える経済はというと、草原はないし、牧畜はないし、遊牧なんかきいたこともないって感じですよ。

それから政治的な権力があるかということ、権力もないんですよ。で、経済的な基盤もない。で、モンゴル国とは遮断されていると、こういう状況なんですよ。自分たちの最後の砦がモンゴル語なんですよ。

もう1つ(抵抗に至る理由)は、中国では、実は文化大革命中にモンゴル人に対してジェノサイドがあったわけですよ。これはモンゴル人が、親中国のモンゴル人であろうと、反中国のモンゴル人であろうと、モンゴル語を話せるにせよ、モンゴル語を話せない中国化したモンゴル人であろうとこの点はみんなが認めるんですよ。

あの1966年から10年間、モンゴル人だけが中国に34万人逮捕されて、12万人が怪我して、3万人近く殺されたというのは、中国の公式データですけど、これだけは認める。これはいわば民族の集合的な記憶になっている。

そこで、去年中国は、よし、これで最後、要するに中国からすると、いいモンゴル人ってどんなモンゴル人というのと死んだモンゴル人。中国からするとモンゴル語のできない中国化したモンゴル人、漢化したモンゴル人がナイスモンゴリアンなんだよ。いや、モンゴルと称しているけど、博物館に行けば剥製があるのと同じぐらいに死んだモンゴル人、「我是蒙古人」(私はモンゴル人です)と中国語で言うのがいいモンゴル人ですよ。それを作りたいんですよ。新疆ではもう成功しているから。

ところがモンゴル人からすると、いや、もうこれ最後の砦まで

壊されるって言ったら、もうたまったもんじゃないと言うことで立ち上がったわけですよ。

ちょっと時系列的にと言われたので、時系列的に言いますと。これ、ちょうど私と、私だけじゃなくて、これ、去年はね、モンゴル人が凄かったんですよ。おそらくすべての内モンゴル人が同時進行的に全部記録したんですよ。何日に何があったかというのを記録し、音声も記録し、動画も記録し。で、それをね、終わってから、みんな記憶として残しているんですよ。素晴らしいですよ。それによるとですね。

6月末に中国政府が今度9月からモンゴル語をまあ、モンゴル語の授業だけは残して後は全部数学も政治も、まあ日本で言えば、公民も全部の教育を中国語でやるという噂が流れたんです。リークです。まあ、わざと流してると言うんですよ…。そしたらモンゴル人がいや、それはダメだということで、一回、ちょっと抗議行動を起こしているんですけど、中国はすぐ否定したわけですよ。「そんなことしないよ」って。そうすると内モンゴルのモンゴル人も人が良いから、すぐおさまったわけで、私だけがしつこく、私だけじゃないんですけど、7月24日からとにかく署名を始めて、それでちょうど今日で一年になるんですけど、7月30日になると3173人が署名してくれたんですよ。8割がモンゴル国のモンゴル人です。ところが、8月いっぱいまでは、内モンゴルの人とは動かなかった。なぜ動かなかったかということ、たぶん大丈夫でしょうと思ったんですけど、もう1つはやっぱり中国が怖いから。で、静かだったんですけど、ちょうど今の静かな内モンゴル人と同じぐらいですね。ところが、8月26日あたりになると。新しい教科書が出てきて、9月からはもう6月のあの噂どおりにすると、いきなりこう出されたんです。8月26日から9月、中国はあの新学期が9月1日からなので、新しい教科書はって言ったら、なんかモンゴルのな色彩が全部消されて。例えば、チンギスハーンの肖像が消されて、単なる草原になっているとか。チンギスハーンのアランゴアの5本の矢の物語が消されているとか、なんかこう小細工から全部こう中国化しているんですよ。堂々とやればいいのに、小細工でいつの間にかなんか挿絵が差し替えられたとか…。ものすごく汚いやり方ですね。

[補足：アランゴアの5本の矢の物語-アランゴアはドブメルゲンとの間に二人の子どもを産んだ。しかし、夫の死後、さらに3人の子どもを産んだ。先の二人の子どもは誰の子かを陰で話し合っていたのを知った母アランゴ

2020年6月末 モンゴル語による教育撤廃の噂が流れる
公文書発布がなかったため、楽観的な見方が大勢を占めた。
危機感を感じた楊海英氏は7/24から署名活動開始

7月29日 内モンゴル自治政府はモンゴル語による出版を禁止、学校内のモンゴル関連肖像画やモンゴル語で書かれたスローガンなどの撤去開始。

8月27日 「生徒奪還運動」← 学校に武装警察が投入される。

8月29-31日 中学・高校生たちが学校から脱出

8月29日(推定) シリンゴルの中学教員ソヨルト氏自殺

9月4日 アラシャン地域の共産党支部書記ソルナ氏自殺

9月12日 中国共産党スニド右旗規律検査委員会、共産党スニド右旗委員会は「モンゴル人中学、小学校において9/13 12時に登校してこなかった学生を退学にする。出席率が低いクラスの教員は3年間の評価の後に免職する」などを内容とした公文書を発布。

9月13日 エレンホト市モンゴル人小学校校長スジナ氏自殺
9月に入ってわずか2週間の間に5人の自殺が報告される。

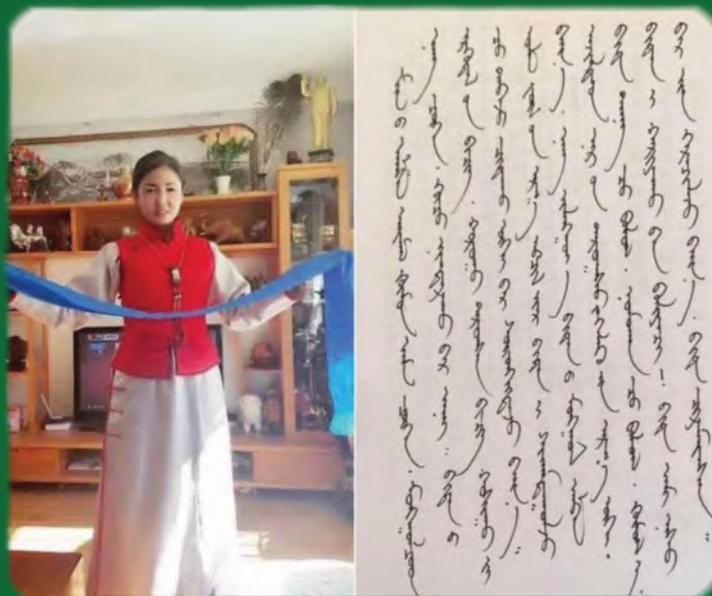
9月16日 中国王毅外相がモンゴル国を訪問。無償援助と引き換えに、内政問題への不干渉を求め、モンゴル国は応じる。全世界、各地のモンゴル人たちによる抗議活動は続けられ、活発化した。

その後、シリンゴルでは教員募集が行われたがモンゴル人教員33名、漢人教員181名が採用になるなど、明らかにモンゴル語環境の縮小を目指していることがわかる。

“私たちのアラシャンアイマグは人口も少なく、モンゴル人もとても少なく、力を合わせるのがとても難しいところです。私たちの嘆願書、署名書はホショー(地方行政区)どまりで、もみ消されています。そして、いろいろな方法を使って私たちは弾圧されています。特に私たち、モンゴル人公務員たちへの圧力は大変なものです。私たちは愚か者になるでしょう。おとなしくなるでしょう。でも、みなさん！私たちに責めるのはやめてください。私たちは命をかけて戦ったんです。”

と、書き残して9月4日、アラシャンのソルナ氏は33歳の若さでこの世を去った…。彼女は共産党支部書記という立場にあったために、他のモンゴル人たちから、政府の手先とみなされ、とても心を痛めていたという。この遺書の後半からその切実な思いが痛いほどに伝わってくる。“あの中国”で共産党関係者の立場で、党に逆らうと言うことは相当の勇気が必要であり、自らの身の危険はもちろん家族知人たちをも巻き込む恐れがある。

そんな彼女の死後、彼女がうつ病を患っていたなどの地元のアラシャン左旗公安局による公式発表がされるなど、彼女への冒涇はさらに続けられた。彼女の夫(アルタンバガナ)の



WeChatへの投稿音声には「妻が弾圧を受け、投身自殺をしたが、病院からはうつ病による自殺だというように求められた」「妻の死に関するネット上のテキストや写真のメッセージを削除するように警告を受けた」ことなどが記録されている。彼は「妻が苦しみと悲しみの中で人生を終えた。モンゴル人よ、これは新たな『文化大革命』だ」と語っている。



鬼城こと、ゴーストタウンと化したオールド市の建設中ビル。2012年当時、すでにゴーストタウン化がニュースになっていたが、現在、どうなっているのだろうか？いずれにせよ、かつてこの土地で暮らしていた遊牧民たちが入居できるような代物ではない。これができたことが、「モンゴル人たちが経済的に豊かになっている」という証拠には決してなるまい。



アは5人の子どもを一同に集めて、一本ずつ矢を折らせ、すぐに折ってしまうをみるや5本まとめて折るように言った。誰も折れずにいたをみて、「おまえたちがいぶかるのもやむを得ぬこと。しかし、実は夜ごとに黄色く光る人が天窓から入ってきては私の腹をさすり、光が腹にはいつていったのだ。彼は天の人なるぞ。おまえたち5人とも私の腹から生まれたのだ。そして、5人仲良くまとまっているように。そうすれば負けることはないだろう」と論じたという元朝秘史第17節から22節にかけての記載されている物語。矢を束ねて結束を説くというのは全世界に広まっている古い民間説話である。西洋のイソップ物語、イスラムのムハラムの話、日本では毛利元就の話などが有名だ。

西村：サラミ戦法ですね。

[補足：サラミ戦法、サラミ戦術。相手に本当の目的を悟られないように少しずつ攻め、まだ懐柔などで妥協を促すなどし続け、いつの間にか殲滅する戦術。1940年代後半にハンガリーの共産主義者ラーコシが「サラミをスライスするように殲滅する」と発言したことに端を発すると言われる。少しずつ、少しずつ、スライスしながら最後には殲滅することを目的としている。中国や北朝鮮の外交戦術に多く観られる戦術であるが、中国では少数民族統治政策に顕著にみられる。]

楊さん：はい、そうですね。そして、もう政策は決まったので、子どもをさっさとを学校に連れて来いと言うことになるわけですよ。そうすると、さすがに内モンゴル人もキレてしまって、8月26日から内モンゴルの東から西にかけて各地でデモが始まったわけですね。

保護者たちが子供を学校にいかせないと、政策を撤廃しろと言うデモが始まって、モンゴル国でも応援が始まって。で、日本でも在日モンゴル人たちが東京と、大阪と名古屋でデモを始めたわけですね。

けれど、中国政府はここからは公文書を乱発するんです。最初はなかったんですよ。普通、例えば教育が変わるなら公文書をまっす出すでしょ？中国だって一応、国家ですから。でも、公文書はないんです。

ところが9月になってから、公文書が乱発されて、いついつまでに子供を学校に出さないと**仕事をクビにする**とか、年配の人だったら**年金をカット**するとか、**公務員だったら公職を追放**するとか、**牧民民だったら融資しない**ぞ。全部、真っ赤なハンコなんで

すよ。

結局は弾圧されて、10月1日、いわゆる国慶節あたりから、子供たちが順次学校に呼び戻されて、中国語中心の教育がスタートしてるわけですね。現在はどうなってるかという、もう現在は分かりやすく言えば、全部文化大革命と全く同じです。そう、多分、新疆みたいに殺してはいないんですけど、真綿で首を絞めて、殺しているんです。

例えば今日あたりに出てきた映像ですけれど、モンゴル人が結婚式を行うのに、毛沢東の肖像画に向かってお辞儀しているとか。毛沢東も死んでだいぶ経つんですけど、1976年9月に死んでいるんですけど、しかも漢族ですよ。モンゴル人が漢族の毛爺様の肖像画に向かってお辞儀をして、それで結婚させてくださいと。チンギスハーンの肖像画じゃなくて、もう、第1に肖像画はもう今は撤去されたり、本棚でもチンギスハーン関連の本が全部撤去されて無くなっているんですよ。いや、うちの前ではもうモンゴル語の本をほとんど売らなくなって、内モンゴルからモンゴル語の本を、例えば西村さんに送るとか海外に送ることが出来ないんです。

そして、ヨーロッパのオランダの宗教団体の報道によると、だいたい1万人ぐらいが逮捕されている。政治学習センターです。内モンゴルの場合は。

西村：でたっ「政治学習センター」！

楊さん：そうそう！毎日政治学習してで中国を称賛し、私は中華民族ですと言わない限り出てこれない。そういう状況ですよ？

西村：いやあ、恐ろしいですね。それでは、もうデモなんてすっかり無くなってしまいましたね？

楊さん：いやあ、デモすれば、今はもうあの政治学習センターじゃなくて、刑務所行きですよ。

西村：すっかり、そういうことなんですね。僕は91年に内モンゴル留学してる時にはですね。彼らが言っていたんですけど、50年後にはモンゴル人たちは、みんなモンゴル語をしゃべれなくなっているからなんて…ね。何、馬鹿なことってんだよ、あきらめてどうすんだよって、僕は言っていたんだけど、「いや、もうそれはしょうがない。アルガグイ(モンゴル語)、アルガグイ」の

一言で全部すませちゃって。50年待たずにその時代が来そうな勢いなんです。そうすると…。

楊さん：もう50年もかからないですね。このスピードだと。でも、実はね、中国のやり方は中国にとっても効果的ではないんですよ。で、どういうことかという、例えばモンゴル語を禁止しなくてもね。もうすでに今までどおりの、去年までの教育でも、国語の教科書は私全部持ってるんですけど、全部中国の小説がモンゴル語に翻訳されたものなんです。例えばモンゴル国のナツァグドルジとかダムディンスレンとかの作品とか無いんですよ。歴史の教科書だったら全部中国史が翻訳されたものなんです。周のときから…、宋がどうのこうのって。で、宋と同じ時代のモンゴルについては一言二言なんです。知らないんですよ。だから結局それで育った学生を、今、私が受け入れているんですけどね。彼らは大学を出た人達ですよ。内モンゴルの一流の大学を出たモンゴル人学生で、しかもモンゴル語で教育を受けて、そういうモンゴル人たちですけど、どうなってるかって言ったら、結局、モンゴル語は話せるんですけども、でも歴史は知らない。モンゴルの文学は知らない。ナツァグドルジとか、「あ、聞いたことはあるけど…」。「ダムディンスレンの作品は何があるんですか？」と…。チンギスハーンは偉大な祖先だけど、チンギスハーンが何年に何をしたっていうのは知りません。で、劉邦は何？っていったらそれは知っているんですよ。こういう人たちなので、日本の高校を卒業した学生にモンゴル史を教えるより難しい。これ、悲しいですよ。日本人の学生で、高校教育を受けたら一応、例えばそのユーラシア史とか世界史とかわかるんですよ。ですけど、今は逆にモンゴルの学校、内モンゴルからモンゴル語で教育を受けてきたモンゴル人学生が教養が無いんです。

西村：これでモンゴル語もなくなるということですね。

楊さん：さらに危ないのは、彼らに、彼女たちにそのモンゴル語のテキストを読ませたら読めるようで、読んで意味が分かってないですよ。

西村：モンゴル文字のモノですか？

楊さん：はい。キリル文字はもう全く読めないから。なぜ読めない

いかというと、結局はその発想方法がもう中国的になってる。だからモンゴル文字は読めるけれど、外国語みたいに読んでいますよ。だから同化されて…もうすでに同化されているんですよ。これ非常に悲しいんですけど、現実ですよ。

だから中国もね、馬鹿なんでね、ほっとけば、モンゴル人はもう死んで、いいモンゴル人になるのに、なんでこう、急いで火をつけてくれて、僕はね、もう習近平バンザイバンザイ。もっと火をつけてくれって。助けてくれたんですよ、習近平は。

西村：でも、どうして？僕も思ったんです。この数年前からウイグルの問題とか、ちょっとおとなしくなっちゃったチベットとか、香港だってこの間、あんなんなあって、人権が人権がって騒がれているのが続いているところで、そこでまた火に油を注ぐような感じで、南モンゴルでモンゴル語教育でしょ、どうして、そういうことやったんでしょ？あの人。

楊さん：あれはやっぱり中国を早く彼は葬り去りたいんですよ。だから我々にとっては習近平さんは非常にありがたくて、ほっとけばね、中国のあの14億っていう人口、そして既に何て言うかな、やっぱりそれなりの経済力があるから、彼らの大海原に巻き込まれた我々はほっとけば、そのうち、経済力に負けて同化されるんですよ。でも彼はね、やっぱり中国を崩壊させたいらしいから、火をつけてくれたんですよ。いろんなところで。死ぬ直前に燃えてるんですよ今。

西村：なんで、崩壊させたいんですか？彼は。

楊さん：いやいや、あの中国は長くなれば崩壊する。それが繰り返された歴史だから。まあ、習近平さんはね、あんまり学問を知らない。小学校レベルの人なので、周りがメチャクチャやってるでしょ。習近平さんは自分で判断力ないんですよ。でもこれ、習近平さんの問題ではなく、周りの問題でもなく、中国という国家。私に言わせると中国人という人はそういうもんですよ。これはあの別にあのレイシスト的な発言じゃなくて、彼らがそもそもなんでチベット人、ウイグル、モンゴル人たちを敵視するかというと、恐れているからなんです。

自分と違う存在って異質な存在に対して一種の恐怖症を持って



内モンゴル師範大学北門で人々を威圧している特殊警察部隊。文民特警と武装警察がある。教育機関に対して国家権力が弾圧をすることができるのが、中国という国である。「厳格な法の執行」という旨が掲げられているが、中国は、法治国家ではないと言わざるを得ない。ここでいう法の厳守というのは、あくまでも中国共産党政府の決定に従うことを意味する。そして、その決定は極めて不公平、不平等なものである。



いるんです。怖いんですよ。怖いからどうする？って言ったら、自分の中に飲み込むか？抹消するかどちらかなんですよ。だから中国人は昔から独裁体制の歴史が始まって以来、ずっと独裁体制で来ているから、知らない人に対して、そもそも外を知らないの、最近ようやくチベット人っているの？ウイグルって何？っていう分かるようになったから。恐怖心を感じているんですよ。自分と違う人に対して。

モンゴル人であつたら、もう隣にカザフがいて当たり前、もうちょっと行くとウイグルか、もうちょっと行くとサモエードか？もうちょっと行くと何？ロシアかって言って普通なんで、「あー、人間だ」と恐怖心ないですよ。と言えば、じゃあ飲もうか！とか。別にあの身体言語で通じるじゃないですか？

中国人は怖いんですよ。だから相手を食っちゃうか食われるか消すかと思っているんです。だから、彼らはそういう暴挙に出るんですよ。

西村：恐ろしいですね。いや、なんか言葉が。いやあ。いや、その傾向と云ったら、僕も91年の留学の時に。感じてはいたんですよ。恐ろしいやつらだなんて。あの天安門事件の後だったんで、全然田舎に行かせてくれなくて、ずっとくすぶっていたんですよ。で、モンゴル語の授業もなく嫌になったんですけど、まあ幸いモンゴル人の友達が出来て。あの師範大学の歴史学部の修学旅行に連れてってもらってですね。1ヶ月半の間、もうモンゴル人たちがバスの中に放り込まれて。ベースになるモンゴル語をやっと身につけられ、そういうでたらめなモンゴル語の覚え方をしたわけでした…。

モンゴル語っていうと、やっぱりその多様な言語じゃないですかあ。その中でも俺のモンゴル語が標準語だとかいったりもするけど、いろんな言葉がたくさんあって、わからなかった私にしてみれば、どれを覚えていいのかわかんなくて。書かせると同じなくせに、読ませるとみんな違うじゃないですか。その辺が僕はね、あのころは大変だったけど、今思うにモンゴル文字の素晴らしいところだなと思うんですよ。みんな違う自分の故郷の言葉で読むんですよ。言え、書かれたとおりに読んでないんだけど、でも書いたらお互い通じあうわけですよ。それってモンゴル語の素晴らしい特徴であり、その異文化とか異なるものに対する姿勢として柔軟なんです。その一方でモンゴル人はすごいオラが

大将で、自分の故郷が1番というような、モンゴル人たちの、ふるさとへの想いの強さというのは分かるんですけども。でもモンゴル語を話せば、下手くそでも何でも、なんでもなんかこう仲間っていうか、敷居を下げて扱ってくれますよね。それがモンゴル文字、モンゴル文化の面白いところだという風に感じてるんですよ。僕はね。

楊さん：いやおっしゃる通りですよ。今日、私がこのウイグル帽をかぶって出てきたのも、実は目的があつてね。要するに我々のモンゴル文字ってウイグル文字っていうんですよ。これ意外とねモンゴル国の人知らないんですよ。はい、ウイグル文字モンゴル語というのを知らないんです。それはキリル文字モンゴル語、元朝秘史なんかは漢字モンゴル語で、中国の西、例えばドンシャンとかバオアンとかってのはペルシャ文字モンゴル語だつてあるわけですよ。アラビア文字でこう書いているモンゴル語も。我々は要するにチンギスハーンがナイマンを統合してから、ウイグル人からウイグル文字を教してもらったわけですよ。おそらくチンギスハーンの子供達はもう読み書きできた。チンギスハーンはできなかったみたいですけど。ウイグル人と我々はもう何て言うかな？昔からの付き合いなんですよ。モンゴル高原で中央、アジアの一員ですから。だからチンギスハーンがね、そのモンゴルを統一してまもなくウイグルの王子が来て、「私はあなたの5番目の息子になります」って言ったら、もうチンギスハーンも喜んで、「わしの5番目の息子に成れ」と、そして娘をやったわけですよ。だからモンゴル人とウイグル人というのはこれはまあ、モンゴル系の民族とテュルク系の民族っていうのは、同じ親から生まれた兄弟民族なので、非常に親しいわけですよ。西村さんがカザフで長いことを調査しているの、ご存知だと思うんですけど、カザフなんかもチャガタイの子孫、ジュチの子孫なんだから、半分モンゴルなんですよ。民族と思うようになったのは最近のことであつて。

同じモンゴル人であっても、テュルク系の言葉を喋っても良いし、モンゴル語を喋ってもいいわけですよ。だから、みんな「なんであんたウイグルにあんなに肩入れして発言するんだ」というけど、それはウイグルは我々の兄弟なんですからね。

で、そのウイグル文字っていうのは、あの中国は去年あれを廃止してあの中国語を勉強しろって言うんですけど、**ある文化が進**

フフホトの寺院。補修、修繕というものではなく、改築。元通りに戻すことには興味なく、作り替えてしまう。そこにあればいいだけで、それを作った人々、利用してきた人々に対する敬意は微塵もない。この傾向はおおよそすべての分野渡って同様のことが言える。すなわち、彼らは歴史じたいを尊重することは決して無いのだ。中国四〇〇〇年の歴史？そんなものは存在しない。彼らは過去を継承しないのだから。彼らが継承を望むものといえば、財産でしかない。金さえあれば、金を生み出すのであれば、大切にすの。ただひたすらに領土拡大を目指すのが中国なのだ。



んでいるか？ある民族が科学技術に向いてるかどうか、文字と関係ない。

1つ例を挙げますと、2つありますけど、1つはね、実は1980年代、西村さん91年でしたよね。ご存知だと思うんですけど、80年代から内モンゴル大学と師範大学は、もうコンピューターのモンゴル語ソフトを開発していたんですよ。そのとき中国はやってないんですよ。だから、内モンゴルのモンゴル人がモンゴル語でコンピューターの技術を開発し、運用しようとしたのは、漢字を使う漢人より早いんですよ。だから出来ない事は一切ないんですよ。

それから、これはもう科学史の専門家なら常識なんですけど、中国っていうのは13世紀の元朝まで科学が停滞しているんですよ。モンゴル帝国が出来てからモンゴル人が西からアラビア語ペルシア語の科学技術、当時、あそこが1番発達してるからで、アラブ人とペルシャ人の科学技術をモンゴル文字で翻訳して、さらに中国語に翻訳してから、中国の科学技術がそれまでの停滞期からちょっと発展するようになるんですよ。だからモンゴル人は何も野蛮人でもないし、モンゴル文字が科学に向いていないということもないんですよ。単なる中国の暴挙なんですよ、あれは。

西村：そもそも今回、そのモンゴル語の教育を切り替えるというふうに言ったことは、同化が目的だというのは、もうそれはもちろん本当の目的なんだけど、それはあまりはっきりと言えないでしょうから。なんか理由をつけてモンゴル語を辞めるんだって言ったと思うんですよ。その時はどういうふうな理由付けで言っていたんですか？

楊さん：それは中国の常套手段で発展と、進歩ですよ。

西村：つまりモンゴルは発展と進歩をもたらさない言語であると？

楊さん：そうです、そうです。そう決めつけたわけです。で、中国語を使えばあのこれは文明人の言葉で進歩、今の時代の科学技術の発展に向いていると…「お前、90年代まで発展してきたのか？」って！すべて、日本の技術を盗んで。最近ちょっと調子に乗ってるけど、なんかえらい昔から俺は発展していたというような顔をして、モンゴル人にそういう顔をするっていうののおかしいでしょう。

西村：今のその論法だと、モンゴル国のひとたちもずっと怒っているんですよ？

楊さん：そういうことですよ。それからもう1つは、これは現実主義で、モンゴル人の一部も、のちに折れたんですけど、中国語を使えば就職に有利とか。このことは彼らの隠し球にしとけばよかったのに、もろに言ってしまっているわけですよ。今までも500万人と言われるモンゴル人の半分にまでモンゴル語ができなくなったような理由も、実はモンゴル人が現実主義者になって、秋になったら子供をどうするって言ったら、じゃあまあ就職と進学はやっぱり中国語が有利だからって、こうなっちゃうんですけどね。

西村：合理的ですものね、生き残ることにかけて。

楊さん：そう、人間はある生き残りが大事だからね。

西村：でも、モンゴル人のその合理性ってすごいと思うぐらい環境適応するじゃないですか。

楊さん：：ああ、すみません(笑)。

西村：ああ、それぞれ、いまちょうど言おうと想ったんですよ。楊さんの日本語のすごさもそうだよなあって思ってた。でも、本当に私のはじめての内モンゴル留学の時も、日本語勉強している子たちが日本に行ったことがないにもかかわらず、「よう、しゃべるなあ、こいつらあ」ってぐらいいしゃべれて。モンゴル国に行ったときも、ロシア語に中国語に、英語に何語に何カ国語もペラペラしゃべれる若いのがいたりで、モンゴル人、すごいなって、本当になんかどどん外モノのこれはこれはいいぞとか便利だぞと思ったら、それを合理的に取り入れて行きますよね。その語彙の面においても。

で、先ほど中国の科学技術なんて話だったと思うんですけど、もっと遡ってしまえば、日本の明治時代に西洋の言葉を日本語化して漢字作ったりしてますね、日本人たちは。それを中国人たちは使ってるわけですよ、実は。ていうような意味で、彼らたちは自分達だけがずっと昔から発展してきたっていう風なイメージで、作り出そうとしているけど、その実、まあ発展しなかつ

たと言わないけども、もっと謙虚になっていい話だどつくづく日頃から思っているわけなんです。そういう意味においてモンゴルの方がよほど進歩的な。楊さんだからと、モンゴルをよいしょしているわけじゃなくて、本当にそう思うんですが、今回のこのモンゴル語教育を潰すにあたって、言うに事欠いて、そういうふざけた理由をつけるのかというのは、何とも腹立たしくありの…。

楊さん：ウイグルで成功しているから、中国からすればね。カッコつきの成功ですけど、まあ内モンゴルも今は押さえ込めたと彼らは思っているはずで…。香港でもあの北京語の教育がもう定着しているので、この政策はまあ当分続けられるでしょう。香港で全く同じ現象が10数年前から起こっているんです。香港人は、香港は広東語ですけども、広東語とかいろいろ方言があるんですけど、10数年前に香港に行ったら、もう小学生が北京語なんです。家帰ったら爺ちゃん婆ちゃんと広東語で通じなくなっていましたよ。で、まあ香港人も去年から爆発したんですけど、やっぱり理由は1つじゃだけじゃないですよ。チベットも同じなんです。

西村：じゃあもう本当に長いずっと前からかなりサラミ戦法でいるんるところをつぶしてつぶして。漢化し続けてきたということなわけですね。

楊さん：習近平さんはちょっと急いだけであって、今までの、別に江沢民がナイスガイだったわけじゃないし、胡錦濤がグッドボーイだったわけじゃないですからね。

西村：今、モンゴルの現地では表立ってその反旗を翻すことはできなくなっていると思いますが、なにか少しでもモンゴル語を子供たちに伝えようというような、なんかそういう動きというものはあるんですか？無いんですか？

楊さん：そうですね、ありますね。その点はモンゴル人はよく努力しますので、例えば日本に居るモンゴル人のいろんな団体も、とにかくモンゴル語を守ろうと。モンゴル語で、例えば番組を作ったり、サイトを立ち上げたり、古いモンゴル文字を教えたりしているし、あるいはモンゴル人の青少年教育に使う学校で少なくともクラスを立ち上げようとかです。

西村：それは日本でですか？

楊さん：はい、もう取り組んでいるんですよ。

西村：現地では？

楊さん：現地でもやっぱりしたたかに対応しています。まあ、何しろやっぱり文化大革命を経験してますので。そう、やっぱり殺されてきた人たちだから、正面からぶつかり合うよりも、中国は早かれ遅かれあの習近平が終わらせてくれそうなので、ここは耐えましようっていうのは、おそらくみんな思っていることなんです。そこはもうコンセンサス(共通認識)ができています。

それから何よりも大事なものは、これ。中国が1番神経をとがらせているのはモンゴル国なんです。モンゴル国はもうウイグル文字モンゴル語をもっとご存知のように、もはや広まったでしょう。実質上みんな使ってるんですよ。で、大統領官邸のサイトを古い文字のモンゴル文字の、ウイグル文字モンゴル語サイトもあるし、新聞も1ページ2ページ出しているし、みんな書けるようになってるし、みんなと意思疎通できてるんですよ。内モンゴルで、いくらモンゴルの歌を禁止し、モンゴルの番組を禁止しても、もう色んなルートで入ってくるんですよ。

そして何よりもモンゴル国の人たちが内モンゴルのホジャたち大変だねーとわかってくれたのでね。あのホジャたちもちょっとかわいそうだから助けてやろうっていう。まあ今もうホジャは自分たちの明日なんですよ、我々はホジャと馬鹿にされてきたけど、もうモンゴル国南部も今中国人に散々買われているし、占領されて、汚されているし、ご存知のようにね。今日の内モンゴルは明日のモンゴルっていうのは彼がわかっているんですよ。それで自分たちもホジャになるっていうのはわかっているから。

西村：えっと、すみません。ホジャについてわからない方もいると思うのでホジャについて一言。

楊さん：あ、すみません。ホジャっていうのはモンゴル国でよく使う言葉で、南モンゴルの人達を指す言葉です。南モンゴルの人たちからすると、ちょっと差別的っていうふうに受け止める人もいます。語源は多分華僑。いろんな言い方があるんで

すけど、要するに中国化した人を、農耕化した、モンゴル語を忘れた、モンゴル人っていうふうに、モンゴル国ではそういうニュアンスで使われるという言葉ですね。

西村：あ、そうなんですね。僕が理解していたのはちょっと違って、中国人たちみんなホジャっていうんだと思ってました。その中でもモンゴル人たちのことを言ったんですね。勘違いしていました。

楊さん：まあ、モンゴル人です。中国人はハヤタッドだから。私は、どうでもいいんですけどね。いろんなところで差別されて育ってるから差別がないと、ちょっと逆に物足りないんですよ。

西村：僕も何かのイベントで、モンゴル物産並べて出して、で、南モンゴルの人がお客さんで来て、モンゴル語を喋っていたらモンゴル国の女の子と日本人の二人連れが通りかかったんです。そしたら、そのモンゴル国の子がこっちをみて、「あ、ホジャね」って私に言ったんです。そのつれていた友達さんは、「モンゴルの人みたいよ」って言ったのに、「いえ、ちがいます。モンゴル人じゃありません」って。腹たって、「おまえ、ちょっとこっち来い！」ってけんかふっかけたんですけどね。そっか、そうだったんだ。今度あったら殺す…。とかって。いやあ、面白いなあ、こういうの。

でも今回、中国はモンゴル国にちょっと神経をとがらせたことがあったからこそ、去年9月早々に大臣がモンゴルに行って無償資金援助するみたいにやって、内政に口出すなよって釘を刺したっていうのは、まさにその表れなんですね。

楊さん：そうです。モンゴル人はしたたかで金くれるなら、もらっておこうって。お金もらうのが大好きな人達だから。もらってからも別に、同胞に対する見方は変わらないんですよ。もう予想通りの展開だね。

去年はね、モンゴル国がものすごく熱心に私たちを支援してくれて、あの前大統領エルベグドルジさんはこれはジェノサイドだと、文化的ジェノサイと明言したし、前々大統領ですかね。前大統領のバットルガさんもいろんな形で支援を示唆していたし。

で、1番ありがたいのはもう普通の遊牧民まで支援してくれたことなんですよ。大学生とかね。政治は政治なんだからそれはまつりごとなんで、カネ来たらポケットに入れて使っちゃおうということなので、それはびっくりするほどのことじゃないんですけど、でも、一般のモンゴル人の危機意識がたかまったこと、そしてモンゴルは分断民族だということがわかったことが、大きいですよ。

西村：あのとき、あまりの仕打ちじゃないかって、あんまり腹立って、動画配信で、モンゴル語で一時間以上まくし立てて、でもあんまり腹立ちましてね、あの仕打ちにはね。いま思うと、恥ずかしかったなと…。モンゴル人は、やはり合理的なんですね。

楊さん：時々合理的すぎると困るんですけど、人間はね。

西村：いや、モンゴル人のしたたかさ…結局、あのソビエト時代にずっと独立国家を保ち続けた強さだろうなんて話も聞くぐらいですからね。今の南モンゴルにいる人たちもとりあえず頑張ってるっていうふうな。あの甘んじてるわけではないと。

楊さん：甘んじてないですよ。ただ、今回の件がなかったら危なかったんですよ。逆に、静かに本当に同化されていく。今回の件があったから、逆にみんなはあの中国の歴史、中国の文学でもいいから、子供をモンゴル語の学校へ行かせようと。で、あのヘタでもモンゴル文字で書いてみよう、ヘタでもモンゴル語で喋ろうっていうのがね。逆にもう定着してるんですよ、今は。なんで私がヘタなの？なんで私かけないのってみんなわかったですから、非常に良かったですよ。

西村：なるほどね。それは実に建設的な未来志向ないい考え方ですね。ポジティブですね。いや、なんか今回ののは悲壮なテーマじゃないですか。悲壮感の漂う悲しいテーマのなかで、このポジティブなお話が聞けるとは思っておりませんでした。いや、さすがですね。

で、日本国内でモンゴル文字を、モンゴル語をつという動きが出てきていると。それってどんなして探したら見つかることができますかね？なんかそれに触れたいという人がいる時に。日本に来てですね、日本で結婚して、モンゴル語、中国語ではなくて、日本語になっちゃってる子たちがいるわけですよ。それもモンゴ

ル語がわからないというモンゴルの。まあ、第2世代第3世代から。そういう子たちを抱える親御さんたちのなんかネットワークみたいなのもあるときいてはいるんですけども、まあそういうことも連携して何か動きってことになって行くんですか？

楊さん：そうです。おっしゃる通りです。モンゴル人は日本に今、僕は去年まで2万人ぐらいいるかなと思っていたらもっといると言われて、数万人いるらしいんですよ。で、あの南モンゴルの人だけじゃなくて、モンゴル国の人も同じ問題を抱えてて…。子供が、日本の学校に行きだしたら、日本語しかしゃべれなくなっちゃうっていう。まあ、その点はあの非常にインターナショナルな問題ですけど、でもそれをどうやって克服するかと。だから、例えば東京近辺だったら、せめて土日でも子どもをモンゴル語の教室に通わせるとか、午前中はモンゴル語、午後はモンゴルの踊り、ダンス、相撲とか。で夜はモンゴルのボーズとかモンゴル料理とかね。そういう風にしてるんですよ。あるいはネットで配信して教えたりとか、いろんな取り組みがあります。最新の技術を使ってオーソドックスなことをやってるんですよ。

西村：それもやっぱりモンゴル人の合理性につながる…いや、本当に異文化の中での、異なる土地での対応性の高さ、適応力の高さっていうのかな？素晴らしいなとつくづく思い知らされます、モンゴル人たちの。日本人が苦手とするところではないかなと感じるんですけど。いこの番組は見てる方もみんなモンゴル人のようになりましょう！って思っちゃったりするんですよ。さて、そろそろ時間になりそうなんですけれども。本当に今日は忙しくて、3時から別の仕事があるのに、出てきていただきまして。で、最後に日本人に向けたメッセージを何か頂けると。

楊さん：そうですね。短くて申し訳ないんですけど、よく聞かれるのは、南モンゴルと北モンゴルいつ別れたのか、なんで別れたのかと訊かれるんですよ。で、それは実は日本と関係があるというのが第1です。それで、日本とロシアが日露戦争の後に秘密協定を結んで、内モンゴルは日本の勢力範囲、北モンゴルはロシアの



チンギスハーンゆかりのトゴ-ボラグに立てられた石碑。
1991年撮影。

勢力範囲というふうに勢力範囲を確定したから、南北になったんですよ。で、1945年に日本が敗戦して、モンゴル国は南モンゴルを統一したかっただけなんですけれど、国際情勢の問題で統一できなかったわけですから。で、それはいいこと悪いことは別として、もう過ぎたんだから。ただ、満州国と内モンゴルに今の内モンゴル自治区の三分の二のところに日本人が数100万人居たんだから。台湾と言えば、みんな台湾は植民地で覚えている親近感持っている。実は内モンゴルも日本の植民地だった。それだけは忘れないでほしいって言うことです。忘れないでじゃあ何かしてくれるかって言ったら、あのまあそれは長いスパンで見ている時にやってくれたら嬉しいですよ。だから内モンゴルは。日本と特別な関係にあったということだけ。覚えておいていただきたい。

西村: ありがとうございます。南モンゴルの問題は、日本の問題であるというふうにぜひ。そうですね。おっしゃっていただいてありがとうございます。本当に本当にたくさん話せていただきました。楽しかったです。

楊さん: ありがとうございます。また呼んで下さいね。

今回の特集・対談について…

昨年、モンゴル語教育撤廃の報が入って以来、できる限り、このことを多くの人に知らせたいと思いつく限りのことをやってきたつもりだ。署名はもちろん、Youtubeで怒りまくったり、イベント会場で機会あれば、「今、中国で…」と話まくったりしてきた。とはいえ、所詮、貧者の一灯にもならなかった。

しかし、日本在住のモンゴル人が中心となって様々に粘り強く抗議活動を行ってきたこともあって、2021年4月21日には自民党有志らによる「南モンゴルを支援する議員連盟」が発足するに至っている。南モンゴルの現状を訴えるにあたり、ウイグル、チベット、香港など、同様に弾圧をうけている人々との連携が大切になり、その結果、徐々に大きな声になりつつあるようだ。

特にウイグル人権問題は国際社会に広く認知されるにいたり、ジェノサイド認定がされ、具体的な抗議措置を講じる国々も少しずつ増えている。

しかし、日本はジェノサイド条約に加入してないからだろうが、人権問題に敏感に反応するはずの人々や、平和を日頃から訴える組織、団体、政党、個人までもが、何を理由に躊躇しているのか不明なのだが、いまひとつ大きな声をあげてくれないように思えてならない。

公明党に至ってはジェノサイド関連情報をフェイクニュースと言いつけり、また自民党二階俊博幹事長のように与野党合意の中国非難決議を葬るに至る媚中議員がいるなど、政治は人権問題と向き合おうとしない傾向が強そうだ。

また、モンゴルを冠する諸団体、組織なども多くあるが、「政治問題」「国際問題」に対しては踏み込まないという姿勢ばかりが目立ち、現在に至るまで多くを教えたくれた、場合によっては自分自身の生活の中心的存在となつてはいるはずのモンゴルの苦しみに寄り添う様子は、控えめに言って、行間からうかがえるかどうかという程度に感じられるに過ぎない。

この問題に関わることで被る不利益は容易に想像できる。いまや、巨大なビジネスパートナーであり、上手に関わることで得られる利益もまた計り知れないだろう。中国は日本で不遇な目に遭っている研究者たちに莫大な資金を提供し、研究の後押しをするなどしており、研究者を取り込もうとしているし、それにびくびく研究者もかなりいる。以前より、親中、御用学者は国内で中国に都合の悪い研究への妨害などを行ってきたと聞く。

私は中国が現政権であり続ける以上、中国には行けないと思っている。中国は大物に手出しはせず、小物をいじめて、様子をうかがいながら徐々に大きな獲物を狙うようになるのだ。私はともかく、多くの人にとって中国との関係を絶つことは避けたいというのが普通の感覚なのかもしれない。

しかし、その関係を続けることによって得られる利益がモンゴル人たちの涙や屍の上に成り立っていると思ったら、だまってそれを享受することは私にはできない。

こんな小冊子でいくらか吠えたとしても何の影響力も持ち得ず、義憤に駆られた自己満足なのかもしれないとも思うのであるが、インターネットで流れ、アーカイブはされるものの、消え去ってしまう情報の一つとしてではなく、「手に取れる紙媒体」に書き

残すことが必要ではないか? と思い、今回の特集を企画した。

この問題に詳しい人物に登壇いただいて、語っていただく。そしてそれを文字起こしして印刷物にして、無料配布をしようと思ったのだ。NPO法人しゃがあの会報としては、会費をいただいている以上、そうもいかないところなのだろうが、今回はどうか、ご了承いただきたいと思っている。全ページPDFにしてネットで配布、もちろん印刷、再配布可として利用していただこうと考えた。

しかし、問題が問題だけに、おいそれと、誰にお願いできるものでもなかった。留学生はとて熱い気持ちを持っている人たちが大勢いるが、帰りを待つ人々がいる以上、巻き込むことはできない。日本に帰化したような人で…と、色々話を聞いていたところで、楊海英氏の名前があがった。いや、むしろ最初から氏にお願いできたらと思っただけなのであるが(大学院の先輩にあたる)、いかんせん、研究に、活動に忙しい氏に、お願いするのは躊躇していたのだ。そんな中を数人のモンゴル人たちが取り持つてくれて、話をつけてくれて、いざ連絡をとって見たところ、快諾いただけたことで今回の企画となった。本当にお忙しいところをどうにか、1時間をいただけたこと、心から感謝したい。氏であれば、超大物なので、当局もおいそれと出だしできまい。

なんの打ち合わせもなく、「それじゃ、時間が来たら話しましょうね」ってだけだったが、期待以上のお話をいただけたと思う。もつと掘り下げた話を期待された方もいらっしやるとは思うが、私の勉強不足とご容赦いただきたい。今回の話の背景となる中国がモンゴル人に対して行ってきた数々の暴挙については氏の著作を読まれることを強くお勧めする。モンゴル人として、単なる被害者感情を声高に連ねたのではなく、研究者としてしっかりと立ち位置を持ってデータを積み上げた著作はどれも素晴らしい力作であり、そんな名著を次々と発表される氏のエネルギーには心から敬服する。

さて、今回の問題を人権問題とするのか、民族問題とするのか、政治問題とするのか、国際問題とするのか…様々な思惑を持った上で、これまた様々な人々が接触してくる。簡単に言えば、右とか左とか、スピ系(?)とか、実に様々だ。

そんな中で、反中国・嫌中国を目的とした急進的な一派が大いに支持をし、声高に活動に参加するのは非常に多く観られる。それが、モンゴル人たちの命がけの行動がただ利用されているように見え、少々、距離を置きたいとも私としては思うのだが、楊氏は「右だろうが、左だろうが、どうでもいい。力を貸してくれるのであれば…。結果的に右が多いみたいだけど、選んでいる場合じゃない」と仰るという。この考え方にはモンゴル人の極めて合理的、かつ目的達成を第一とした姿勢が見受けられるが、同時に満州帝国末期のモンゴル人たちの独立運動、自治獲得運動の歴史に重なっているようにも見える。あのときもロシア、日本、中国、さらにはモンゴル人民共和国(当時)がそれぞれの思惑をもって内モンゴルに関わった。そしてその結果、南モンゴルの人々は民族存亡の危機と直面することとなった。

過去に起きたことは、起きたことと氏も仰っている。そのことをとやかく言わないこと、それは歴史と正しく向き合うべき姿だ。そんな氏の期待を我々は受け止めなければならないだろう。良き隣人として、ともに生き続けるために、建設的な未来を作り上げるために、かつてのように投げ出したり、裏切ったりすることなく関わり続けることが我々に求められているのだ。

近い将来において南モンゴルの子どもたちが、両親とモンゴル語で語り合い、モンゴルの昔話が語り継がれ、祖母にモンゴル語で手紙を出せるようなそんな時代が続くことを心から祈り、願いたい。



内モンゴル自治区区都フフホトのモンゴル文字よりも漢字ばかりの町並み。モンゴル語を漢語に置き換えただけでは、元の意味は失われる。フフホトは「青い街」という意味だ。モンゴル語が失われた時、フフホトという街の歴史、かつては「青い街だった」という記憶そのものも失われるのだ。



シャーマン儀礼映像保存プロジェクトのご報告

1990年代初頭、モンゴル人民共和国の社会主義体制は崩壊し、それまでひっそり守り続けられてきた大切な生き方は、再び息を吹き返した。

シャーマン(ボー)と呼ばれる人々が、人々と精霊を再びつなぎ合わせ、どのように何をするべきか、導き始めたのだ。

1994年から2004年の期間に出会い、記録したシャーマンの生の姿、彼らの思いや知恵を残さねばならないと思った。

それは、彼らからの時空を超えた贈り物なのだから…

私事で恐縮だが、大学生の時にシャーマニズムに興味をもったのがきっかけでモンゴルと一生付き合うことを決めるに至った。

1991年に南モンゴル地域に留学し、その後、民主化後のモンゴル国へ留学、人間関係を広げていくなかで、運良く、1994年にダルハド盆地へ行き、そこでツェグメッド婆さんに会った。

社会主義崩壊直後のダルハド盆地の人々にとっては、社会主義時代に仮想敵国として話に聞かされてきた“日本人”は、おそらく私が想像できた以上に異邦人であったに違いない。にもかかわらず、ダルハド盆地の人たちはとても快く私を迎え入れてくれた。これには同行してくれた運転手シンジェーの人柄や、ある意味、特殊能力のような人なつっこさがあったことは特記するべきだろう。

周りの人々に恵まれて、私は初めてのダルハド盆地滞在中にツェグメッドさん、ツェレンマーさん、バヤルさんという実に高名な女性シャーマン(オドガン)に出会い、儀礼を見せてもらったのだ。

私の下手な調査は時間がかかる。会っていきなり、根掘り葉掘り聞くのは苦手、いや、嫌いなのだ。時間をかけて、いろいろな話をしながら、昔話や愚痴みたいな、そんな話を相手が話したいだろうことを聞きながら、そ

の中で知りたいことを聞き出すのが私のやり方で、これはどうしても時間がかかる。

が、「この人」と思えたシャーマンは皆、高齢で、残念なことに、十分に話を聞き出すことができなかったと思う。

困ったことに、モンゴル中央部から学者、研究者がやってきて、「シャーマンとはこのようにあるもの」とかっていうことをごちゃごちゃ触れ回ったこともあって、それにならえと、それまでとはちがうことを現地側の取り巻きたち(シャーマン自身ではなくて)が言い出したりして、聞き取り調査はややこしいことになってしまった。この傾向は、1997年頃からすでに浸透し始めていて、その影響は今、顕著にみられる。

それはそれで、今のシャーマニズム研究とか、難しいなんとか理論とやらで分析をしていただければよくて、私の興味はそこにはまったくなかったし、今もない。

私の興味は、シャーマニズム研究をはじめたそのときから一貫している。

「モンゴル人のシャーマニズムとは、彼らにとってなんであるのか?」である。

ある意味簡単で、全人類に普遍的な答えがすでに用意してあって、そんなもんはと即答されてしまうのかもしれないのだが、当のモンゴル人たちが即答する

が、シャーマンを含めた彼らの世界の形を知ることが必要だと思いついた。彼らの世界がジグゾーパズルみたいにできていて、シャーマンとその周辺のピースなしにはそれは完成しないものであって、その世界の中で人はどのように生きることが求められているのだろうか? どうあることが望ましいのだろうか? という、私の個人的興味で、ただひたすらにシャーマンの行動を追い続けることになった。

私が記録した儀礼について、もう一点、明記したいことがある。

私がシャーマンを訪ねるようになった頃、内外の研究者もそれほど多くは無いにせよ、彼らの所に来るようになっていた。通常、シャーマンの所について、儀礼を見せてくれと頼むことになるのだが、大抵の場合、シャーマンを取り巻く人々がそれに対して対価を求める。徐々にシャーマン自身が求めるようになっていった。つまり、研究者や観光客が来たときに報酬を得るために儀礼を行うことが増えてきたのだ。いろいろな儀礼パターンがあるのだが、定期的に行う儀礼、生活の節目で行う儀礼、依頼を受けて行う儀礼がある。研究者や観光客の依頼というのは、シャーマンの行為がみたいだけであって、なくし物を探してほしいとか、病気の原因を視て



ではないのだ。今であれば、どっかの誰かが言ったり、書いたりしたりすることを語ってくれたりするが、初めて会ったとき、彼らは、自分の役割を果たすだけという態度であって、自分がしていることを雄弁に語る人はいなかった。

「ノインノローに観てもらってください」という依頼をうけて、観たままを伝える。ただの媒体でしかないかのようなのだ。そんな様子を見ていて、私は、いまだに解に至っていないのだ



北アジアのシャーマンたち
- 時空を超えた贈り物 -

ほしいなどという依頼とは意味が異なる。短期間の滞在による取材では、土地の彼らが土地の人々にとっての必然で行う儀礼の記録は、運次第だ。

私が記録した儀礼も、いくつかは「儀礼を見せてほしい」といって頼んだものだ。もちろん、「運転手が白いクソをするようになって久しいので、その理由をみてほしい」などといった“依頼”をするくらいはしている。

しかし、記録した儀礼の多くは、たまたま出くわしたモノだ。例えば、「新しい土地に来たから…」「結婚で新しい世帯が生まれたから…」「今日は定期儀礼の日だから…」といった具合で儀礼を記録できたのはまさに幸運だった。儀礼の形式がどう違うのか？は正直いってよくわからないのだが、それでも、お金を払って見せてくれと頼んだ儀礼との違いが、もしあるのであれば、資料価値は高いといってもいいだろう。

しかし、先に述べたように、私の調査方法や自身の能力の至らぬが故に、記録しきれなかったことがたくさんあった。

特に、シャーマンが歌う歌の文字起こしは完全に私の能力を超えていて、断片的な理解はできるのだが、全体像をつかみ取ることができていない。いつかやるぞ、いつかやるのだ！と思いつつながら、かれこれ、四半世紀が過ぎてしまった。この四半世紀で私の能力が、この期間に見合うほどに発達したかというところむしろ劣化していること、実に恥ずかしい限りだ。

こうなることは予見できていたので、ずいぶん前になるが、儀礼を録画したHi8カセットやminiDVカセットからデータを引き出し、DVDディスクに保存しておいた。いずれ、再生ができなくなるだろうことがわかっていたからだ。モンゴルで購入したVHSビデオなどもDVDディスクに保存し直していた。

ところがである。2020年のコンサートツアー中に開催した遊牧文化講座「モンゴルのシャーマニズム」で一般初公開と銘打って儀礼の様子をご覧いただくとしたのだが、なんと、ディスクのデータが読み込めなかったのだ！どうやってもデータが読み込めないのだ。この時は写真スライドでご勘弁いただいたのだが、問題は解決しない。

オリジナルのテープはもちろんあるのだが、このまま放っておいたらカビが生えて、再生できなくなるのは時間の問題だ。が、Hi8ビデオカメラはとうの昔に無くなっていて、miniDVビデオカメラも再生ヘッドが摩耗してしまえば、再生できなくなる。

中古で再生機を探したのだが、Hi8再生機は動作はするが、ジャンク扱いでというようなものばかりで、再生したことでテープがおかしくなる可能性も否めず手を出せない。完動品と銘打ってだされているものは7~8万円以上もする…。miniDV再生機はまだまじりはあるが、パソコン側がIEEE規格に対応しているものをわざわざ準備しないとデータを取り出すことができないではないか…。どう考えてもデータのデジタル化にざっと20万円はかかることがわかった。当然、私個人ができるレベルの話では無い…。学術的にもきつと貴重で重要な資料になるから…と言っても、単純に私の手元に資金は無かった…。

NPO法人になってから、ことあるごとに、支援者の方々をお願いばかりをしては、企画を実行させていただいてきたこと、感謝という言葉では言い表すことはできなく、また、いつまでたっても経済的に自立できないNPO法人として恥ずかしくあるのだが、あまりのんびりしていると、テープもだめになる…。

というわけで、2020年11月に、「シャーマン儀礼映像保存プロジェクト」と銘打ってクラウドファンディングを始めることとなった。目標金額は設定しなかった。いざ、はじめたら何が必要になるか想像できなかったからだ。特にHi8再生機はオークションで入手する可能性があり、落札価格がいくらになるか





見当もつかなかったのだ。

目的は、1. フィルムメディアのデジタル化 2. ダイジェスト版でDVDを制作すること(販売用) 3. 上記2点を遂行するに必要な機材他を購入することであった。

クラウドファンディングのリターンとして、生データ全部、販売用DVDなどをお返りする予定で開始した。

さて、はじめてみると、思っていたより多くの方々のご支持を賜ることができた。

デジタル化の作業自体は、想像以上に困難だった。とにかく、Hi8再生機を購入して、PCに出力、録画することから始まったのだが、8万円近くだして購入したにもかかわらず、再生機の細部に不具合があって、妙なところで不要な情報が画面表示されてしまったり、高画質再生できると言われていたのに、それが思うように行かなかったりしたのだ。だましまし録画を進めるのだが、テープの中にはまったく再生できないモノがあった。原因は湿気などによってテープがかびついてしまい、互いに張り付いてしまっていて、テープ送りに支障を来すのだ。ネットで補修用テープを購入してカセットを分解、テープの補修に取りかかったのだが、不慣れな私は、おそらく全部で5~10分ほどを消失させてしまったことと思う。あまりの作業の難しさに結果的に業者にダビングを頼むことにしたのだが、総額で5万円もかかってしまった。しかし、背に腹はかえられない…。miniDVカセットに関

しては、古いminiDVカセットビデオカメラを提供いただけだったので、比較的順調にダビングできたのだが、これも時々何が悪いのか不具合が起きて録画途中で止まるなどする。手持ちのビデオカメラも古いので再生ヘッドが信用できないのでダビングに使えないと思っていたが、試しにこれを使ったら再生できたり…。何がどうなっているのか、さっぱり理解できなかったが、とにかくHi8, miniDVカセットの映像をPCに取り込むことに成功した。

次はビデオ映像のクリーニングだ。特に音声を少しでもクリアにしたいと思ったのだが、これがまた実に神経を使う作業となった。儀礼収録時に、写真撮影も並行して行っているのだから、時々シャッター音がうるさくなる。また、フィルムを巻き戻す音もひどいものだった。これを消したいと思ったのが悲劇の始まりだった。ある程度まで自動で音源をクリーニングしてくれるソフトを購入したり、波形をみて不要な音の要素を消すソフトを使ってみたり…。下手をすれば元の音がおかしくなってしまう、聞くに堪えなくなるのを調整するなど、かなりの時間をこれに費やしたのだが、結果、途中で、元音源がおかしくなるやら…と諦めることにした。

次いで大変だったのが、2台のカメラを使って収録していたモノをまとめ、適宜カメラアングルを切り替えて映像を一本化するというものだった。音声の波形を解析してピタッと合わせてくれるソフトもあるのだが、そ

ろ資金が底をついてきていたので、あきらめて、波形にとらめっこを続けることに…。

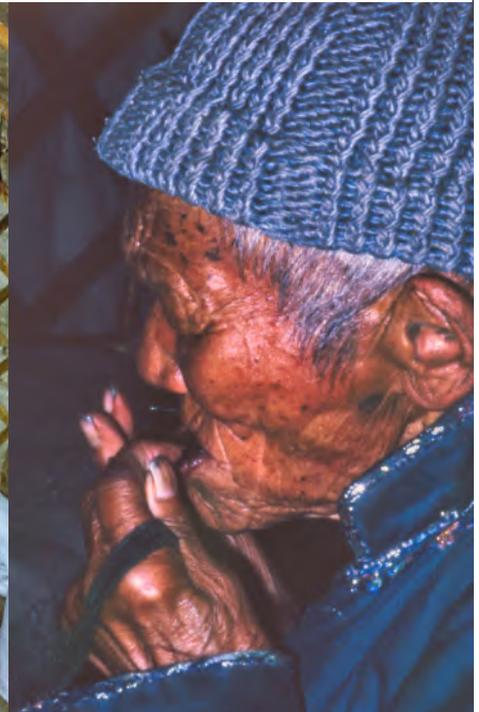
それらができたところで、今度はDVD制作に取りかかることになった。素材ができあがっているのに、あとは切ったり貼ったりし、説明キャプションをいれて、ジャケットを作って…。できあがるまでプロジェクトを立ち上げてからほぼ半年かかった。

結果的には、少々赤字になってしまったのだが、これから先、DVD販売や上映会開催などで、きっと補填できるだろう。そして、なにより、誰かが必要だと思ったときに、手に取れる形にできたことがなにより成果だと思うし、そもそもそれが最大の目的なのだ。

先に告白したように、私のモンゴル語の能力では彼らがなんと言っているのか、すべてを解し得ない。が、将来、誰かが文字起こしして解釈をしてくれるかもしれないという祈りに似た望みをつないだつもりである。

データがデジタル化されたことで、様々に加工して利用できるし、上映会イベントを開催したり、個人で購入して楽しむこともできるようになった。

何を言っているのかわからない儀礼を2時間も見続けることを何度もするとは思えないが、放っておいたらゴミになってしまったであろう映像がこうして残すことができたのはひとえに、しゃがあの活動を支援して下さる方々がいたことに尽きる。重ね重ね、心からお礼申し上げたい。



写真集「遊牧世界の子どもたち」 ～好評発売中です～

2019年、2020年に開催した写真展「遊牧世界の子どもたち-遊んで、笑って、働いて、学んで-」に合わせて制作発行した写真集です。写真展で展示した写真以外の写真も収録してあります。

A5版 フルカラー
写真35点収録
価格：1980円(税込)

こちらで販売しています。



遊牧世界の子どもたち

- 遊んで、笑って、働いて、学んで -

デール作りませんか？

モンゴル服をデールと言います。本当は、裏地のついたちょっと厚手のモノをデール、薄手のモノをテルリグと呼ぶのですが、一般的にデールと言います。

巻き衣装ですので、日本で着るには少々暑いかもしれませんが、冬場にコートのようにして着ると実は相当おしゃべりだったりします。また、薄手のもの、半袖ものとかであれば、秋、春にも着られます。

かなり古いネタですが、イングランド出身のロックバンド、ピンクフロイドのアルバム「ザ ウォール」を映像化(1982年：監督アンバーカー)した時、主人公のボブゲルドフは、なんとモンゴル服を着ているんです！(だからどうした？とかいわないで…)

そんなデールの注文販売を再開します。以前も注文販売をしていたのですが、わけあって、しばらく休止していました。

作り手のセレンゲの生活状況などいろいろな原因があったのですが、実は去年あたりから注文制作をはじめています。

我流で、いや、母親に教わったままに制作してきたセレンゲでしたが、ここ数年、様々な勉強をして、本人、自信をつけたようです。で、満を持して、再び注文制作を受け付けてほしいと言い出しました。コロナ禍のために、材料費が高騰し、以前より値上がりしています。

注文の流れは以下の通りです。

- ①注文：サイズの他、希望色、刺繍の有無(個数、大きさなど)
- ②確認：現地側から布の提案として数枚の写真を送りますので、その中から選んでいただきます。
- ③制作→④お届け→⑤お支払(送料実費がわかり次第併せてご請求します)

デール代
男性用

シルク・刺繍つき 29000円
シルク・刺繍なし 22000円
普段着・刺繍つき 27000円
普段着・刺繍なし 20000円

女性用

シルク・刺繍つき 26000円
シルク・刺繍なし 20000円
普段着・刺繍つき 20000円
普段着・刺繍なし 18000円

刺繍追加：一点につき 7000円
服の仕様(縮入れ、裏地なし、半袖など)のご相談承ります。

詳細はwebサイトをご覧ください。



那須高原でゲルに泊まろう！



【宿泊料金】

一泊二食付き 11,800円

*人数、シーズンで料金が変わります。

詳しくはHPをご覧ください。

*小学生70%, 幼児50%, 乳児1,100円

*大人のみ入湯税150円がかかります。

モンゴリアビレッジ テンゲル

〒325-0302 TEL:0287-76-6114

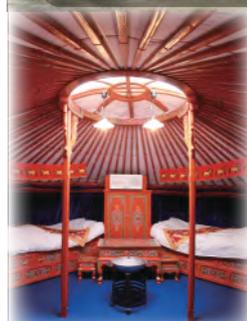
栃木県那須郡那須町大字高久丙1577-9

<https://www.tenger.jp>

tenger@tenger.jp



ゲルは全部で15棟。モンゴルのツーリストキャンプ風



エアコンやテレビも完備

秋の紅葉、冬のスキー、春の新緑…。

自然豊かな那須高原でゲルに泊まってみませんか？

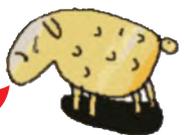
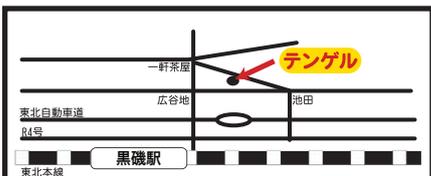
ご宿泊はモンゴルの「ゲル」。今日だけあなたのおうちです。

ボリュームたっぷりの食事や温泉、民族音楽の演奏、デールを着て記念撮影(記念撮影用/一着1000円)など、思い出いっぱいの時間をお過ごしいただけます。

観光スポットへのアクセスもよし！

フレンドリーなスタッフがお待ちしております。

しゃが読者限定！大人1000円引！
予約時にお申し出下さい！
(除外日あります)





NPO法人しゃがぁ事務局から 活動報告と今後の予定

法人の活動を知っていただき、なにか、どこかのタイミングで是非、参加いただくなり、有効に利用していただきたく、前年度の活動報告と次年度の活動計画をお知らせします。

2020年度活動報告(主なもの)

2019年9月から2020年8月までの間に、下記の活動を行いました。

- ・会報「しゃがぁ」発行
モンゴル情報紙しゃがぁ vol.57発行しました。
- ・スタディツアー (19年9月,12月)
「トナカイに乗ってタイガに行く」(2019年9/1~9/8)
「イヌワシ祭ツアー」(2019/9/11~9/18)
「タイガで年越しツアー」(2019/12/27~2020/1/3)
- ・「遊牧の民の調べコンサートツアー」(2020年1~7月 52回開催)
- ・写真展・企画展開催
19年 11/23~12/14
「遊牧世界の子どもたち」(網走市北方民族博物館)
20年 1/17~2/1
「遊牧世界の子どもたち」(大阪 TinaLente)
19年 12/14~20年3/22
「遊牧民のくらし-草原の民と砂漠の民~」
神奈川県立地球市民かながわプラザ企画
(写真およびコンサート提供)
- ・遊牧文化講座
全国各地にて計18回開催。
「北アジアの遊牧世界-彼ら目線で観る自然-」
「トナカイ飼育民の方位観と世界観-水平の彼方にある故郷-」
「カザフ人の音楽世界をさまよう-万華鏡のごとき変化の中で-」
「カザフ遊牧民と馬」
「文字にならない文学-口承文芸の世界-」
「北アジア遊牧民の食文化」
「精霊と語る人々-モンゴルのシャーマン」
「遊牧民の音楽とはなにか?」
「モンゴル遊牧民と馬」
「モンゴルの口琴」
「モンゴルのホーミーってなんだ?」
「遊牧世界を生き抜くために」など
- ・馬頭琴ワークショップ
コンサートツアーと平行開催で2020年1-3月に全国各地にて6回開催しました。
- ・くるま de オスト運営
事務局がある北海道京極町のふきだし公園内にて博物館のアンテナショップ
- ・各種オンライン事業



2021年度活動予定(主なもの)

- ・会報「しゃがあ」発行
モンゴル情報紙しゃがあ vol.58発行。
- ・「イベントツアー」(2021年1~3月)
毎年恒例だったコンサートツアーがコロナ禍のため、演奏者の招聘ができず、理事長西村が単独で各種イベントを開催しながら全国を回ります。
 - ・写真展や移動博物館
 - ・講座、遊牧文化講座
 - ・モンゴル民話語り
 - ・各種映像作品上映会
 - ・馬頭琴ワークショップ
 - ・遊牧民雑貨即売会
- ・写真展・企画展開催
- ・遊牧文化講座
オンラインでの活動を中心に不定期開催します。アーカイブ視聴もできます。
2021年8月現在、アーカイブされている講座
「ホーリントラガを読む」
「北アジアのシャーマンたち」上映会
「モンゴルと文化人類学」
- ・くるま de オスト運営
北海道京極町ふきだし公園にて遊牧民雑貨店を運営。
- ・オンライン事業
Facebook liveやYoutubeなどによる「遊牧民の部屋」「Virtual Gallery Talk」などの配信。
遊牧文化講座オンライン版の他、モンゴル語講座などの提供。
- ・各種DVD制作販売
- ・写真集などの制作販売
- ・遊牧民雑貨即売会開催
通常、コンサートツアー時期(1-3月)にのみ開催していた雑貨販売でしたが、東京、大阪地域を中心に3、4ヶ月に一回くらいのペースでの開催を計画。
併せて、写真展やトークイベントなどもできればと考えています。



遊牧民雑貨即売会

モンゴルフェルトとカザフ民族刺繍、鞆下、スリッパ、岩塩etc...
会場中に各種イベント(写真展・文化講座・民話語り)いろいろあります! お気軽にご参加下さい!



「遊牧民の部屋」不定期配信。基本的に理事長西村の昔話、よもやま話です。時々、ゲストを迎え対談も配信します。

「Virtual Gallery Talk」不定期配信。テーマを決めて、バーチャル写真展のような感じで写真をお見せしながら様々なエピソードなどをお話します。



配信はfacebook, Youtube. 過去の配信は



「遊牧文化講座Online版」Zoomを使った文化講座です。今後、シリーズ化し、日程が決まり次第発表、募集を開始します。当事者目線を常に意識しながら、遊牧文化的発想、感じ方を、様々なテーマから探る内容でお届けします。

シリーズ講座の他に、単発で開催するものもあります。

詳細はQRコードからwebサイトにアクセス、ご確認下さい。



「モンゴルの民話語り」モンゴル民話を、物語として紹介するだけでなく、物語の背景などについて突っ込んで読み解いて行きます。語り部と言えるようになるにはもうしばらくお時間をいただきますが、すでに好評いただいています。馬頭琴による伴奏をつけていただいている語りの会もあります。

NPO法人しやがあの事業紹介

「この法人はモンゴルの文化・伝統に興味を持つ市民・団体のために演奏家等の招聘事業、各種情報収集およびそれらの提供などを行うことにより、異文化理解を促し、国際的文化交流を図ることを目的とする。」と定款第3条に定め、第4条で特定非営利活動の種類を

- ①学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動
- ②国際協力の活動
- ③子供の健全育成を図る活動
- ④情報化社会の活性化を図る活動
- ⑤前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動としています。

第3条の目的を果たすために、特定非営利活動に関わる事業として、

- ①演奏・講演・展示事業
- ②交流支援事業
- ③調査研究事業
- ④情報発信事業
- ⑤体験施設事業
- ⑥伝統文化保護・伝承事業
- ⑦販売事業
- ⑧旅行企画事業
- ⑨翻訳・通訳事業
- ⑩この法人の目的達成のために必要な事業を行うこととしています。

「遊牧の民の調べコンサート」

演奏・講演・展示事業

小学校、幼稚園、保育園、各種施設などで出張コンサートを行います。

(期間、時期は限定されています。)

内容は

- 15分間-スライドレクチャー
- 15分間-ドムブラ演奏(カザフの歌と曲)
- 15分間-馬頭琴演奏(モンゴルの曲)
- 10分間-モンゴル&カザフセッションとなります。

時間が許すのであれば、子供たちが馬頭琴およびドムブラに触れるワークショップも可能です。

この活動を法人として中心活動に据えており、無料コンサート実施のため各種助成金申請を積極的に行っています。助成金をいただけた場合、このような音楽に触れる機会を得にくい地域を優先してコンサートを行います。

助成金を得られない場合は、1公演につき通常10万円をお願いしていますが、出来るだけ沢山の子供たちに、聴いてもらいたいという意図で行っている事業ですので、柔軟に対応いたします。

一日に近隣施設2~3カ所での開催を企画頂けた場合は一回あたりの公演費用を35000円としています。是非、ご相談ください。

子ども向けコンサートを運営する資金調達のために平行して一般向け通常コンサートも全国展開します。様々なコンサート形態に対応出来ます。1公演12万円をお願いしていますが、これもまた柔軟に対応したいと思っておりますので、一度ご相談ください。



「写真展」事業

演奏・講演・展示事業

写真を通して、土地の様子や人々の暮らしや文化を、理解していただくために、様々なテーマで写真展を企画します。主に自然環境と生活を中心とした写真展となります。

「タイガの生活」

約40枚のタイガの生活風景写真。

「モンゴルの草原」

約30枚の草原地域での生活風景写真。

「ゴビというところ」

約20枚のゴビ地域の自然・野性動物、生活風景写真。

「カザフの土地と暮らし」

約30枚の西モンゴル・アルタイ山麓に住むカザフ人たちの写真。

「精霊と暮らす人々」

約30枚のトナカイ飼養民ツァータンの生活と、シャーマンの活動の情景写真。

「モンゴルの子供たち」

約30枚の遊牧生活を行う子供たちの情景写真。

「草原の働く女性たち」

約30枚の遊牧民女性たちの姿をテーマにした情景写真。

「カザフのイヌワシ祭」

約30枚のバヤンウルギーで開催されるイヌワシ祭の様子から、カザフ人の騎馬文化をテーマにした情景写真。

上記テーマの他にも様々なテーマで写真

展を開催できます。また可能であればスライドレクチャーなども行います。

さらに各種イベントへの

「写真パネル貸出」も行います。

パネルをそれぞれのテーマで約30枚程度とキャプションや地図などをセットにして貸し出します。期間に併せてパネルを送り、主催者さんが展示、終了後、送り返していただきます。

貸出料金は送料(実費)の他、額縁などの消耗品減価償却代金として写真一枚、一週間に付き50円をいただきます。つまり30枚レンタルした場合、30枚×50円=1500円になります。

オリジナルCD・DVD制作・販売

販売事業

オリジナルCD、DVDの制作販売を行います。フィールドワークの途中で出会ったモロモロを作品化していきます。

NPO事務局手作りで制作になりますが、商業ベースのCD、DVDではありませんので、売上を重視した商品作りではなく、自由に出したいモノを出せます。そのため、「売れないかもしれないけど価値がある(はず)」という内容の作品がリリースされます。レアな音源、映像をお届けしていきたいと日夜フィールドワークにいそしんでいます。

しやがあならではのCD、DVDにご期待ください。



スタディツアー 旅行企画事業

「国際交流・異文化理解は現場無くして生まれません。それも、いわゆる"普通の関係"から始めなければならない」という信念に基づいて、遊牧生活を送る人々、自然と共に生きる人々との直接交流に主眼をおいたツアーを企画、運営しています。

ツアー内容は時々で変わりますが、(株)風の旅行社さんと共同企画で、開催しています。

タイガで仔トナカイに会いに黄金に輝くタイガでトナカイキャラバンカザフ鷹匠宅ステイ&イヌワシ祭超体験型遊牧民宅ステイ&焼印の儀ワイルドキャラバン乗馬ツアー極寒-40℃のタイガでトナカイと年越しなどの現地との長い関わりがあるからこそその安心と安全な環境の中で、深く現地の人々と関われるツアーを行っています。

また、不定期ですが、理事長西村のプライベート撮影旅行や調査旅行などへの同行者を適宜募集しています。

アルタイ山脈横断旅行や野生動物探してうろうろ、在野の演奏者を求めて放浪したりなどの旅行になります。現地集合、現地解散という形での開催になります。

諸々自己責任になりますが、その分、かなり格安で、珍しい場所なり、ツアーでは行きにくい場所へ行けます。

予定はFacebookなどで適宜発表しますので興味のある方は、チェックをお願いします。もしくは直接、お問い合わせください。



会報紙「しやがあ」発行 公式サイト運営 情報発信事業

かつての"モンゴル情報紙しやがあ"は、2008年秋以降は、当法人の会報「しやがあ」となり、賛助会員(年会費2000円)に年一回お届けします。「しやがあ」

では、フィールドワークで出会った様々な出来事を書き下ろし、沢山の写真とともに、"様々なモンゴル"をお届けします。現地と深く広く、多様に関わってきたしやがあならではの記事をお届けします。また、可能であれば、外部執筆者からの特別寄稿という形で、レアな記事も提供していきます。

インターネット上の公式サイトでは、ブログ形式で様々な話題をとりあげながら、可能な限り映像や音などのマルチメディアコンテンツも提供しています。

<https://www.shagaa.com>

各種ワークショップの開催 交流支援事業

馬頭琴を聴く機会はコンサートで提供を続けてきましたが、直接触れたり、演奏体験をする機会の要望が高くなりそれに応えようと馬頭琴ワークショップの展開をはじめました。

また2020年よりドムブラワークショップもはじめています。

コンサートツアーと合わせて全国で開催していきます。



「遊牧文化講座」 演奏・講演・展示事業

2018年秋より、遊牧文化講座と銘打って、理事長西村が長年のフィールドワーク経験を元に、様々なテーマで講演会をオフライン、オンラインで開催します。「永遠のあこがれ - 遊牧世界を彷徨う -」「北アジア遊牧民の食文化」「モンゴル遊牧民と馬」「北アジアの遊牧世界」「モンゴル遊牧音楽の原点」「トナカイ飼育民の方位観と世界観」「カザフ人の音楽世界」「文字になカザフ人の音楽世界」「文字にならない文学 - 口承文芸の世界 -」「遊牧民の死生観 - 水平線の彼方のふるさと -」「モンゴルのカザフ人」などの他、ご依頼に併せて開催可能です。

いずれの講座も、「遊牧民にとって〜とはなんであるのか？」に主眼をおいた内容とし、現地で見聞きしたたくさんのエピソードを紹介しながら、アプローチを試みるというものです。お気軽にお問い合わせください。

“くるまdeオスト”運営 販売事業

しやがあが運営する博物館(準備中)のアンテナショップを北海道虻田郡京極町ふぎだし公園にて営業しています。

店舗では、CD、DVD、絵葉書などしやがあオリジナル商品、モンゴル・カザフの刺繍小物のほか、土地の山菜・野菜なども取り扱っています。

ふぎだし公園はたくさんの方々が水を汲みにいらっしやいます。一度に数百リットルを汲むような方々のための台車レンタルも行ってあります。

遊牧文化を伝える小さなスポットとして行きたいと考えています。



北方アジア関連事業相談承り 交流支援事業

写真パネル貸し出しの他、各種イベントでの講演やスライドレクチャー、物品貸出なども承ります。貸出物品として、事務局で用意しているのはモンゴル服、民具、おもちゃ(シヤガイ)などです。また、ゲル購入やモンゴル物産輸入などのご相談も承ります。

モンゴル関連サイト制作 ホスティングサービス 交流支援事業

モンゴル関連非営利団体に対しましては無料でサーバースペースをレンタルします。通常団体に対しましては有料になります。また、WEBサイト制作も格安にて承ります。作った後の更新作業が簡単にできるようなサイト(ブログなど)も出来ます。独自ドメインでのサイト運営、メールアドレス取得をご希望の方はご相談ください。



編集後記

コロナのせいにするにはそろそろ限界があるようにも思い始めているのですが、まずはいいわけを…。とりあえず、聞いてやって下さい。

なんのいいわけって、しゃがあ発行遅れのいいわけです。

NPOしゃがあの年度は九月開始です。で、会報は、その性質上、年度が替わったところでさきっと出るのがいいのだと思います。わかっているのです。ですが、通常ですと、九月末まで私、西村はモンゴル地域にいて、しゃがあの編集作業にとりかかれませんが、帰国後は、まずは敷地内の草刈りをはじめ、そして落葉キノコ採りに追われます。それらと平行して、一月にはじまるコンサートツアーの準備をしなければならず、さらに、例年であれば、年末年始はまたまたモンゴルでツアー。そして、コンサートツアー開始…。ですの、それらが終わって一段落した四月発行というのがスケジュールです。

ところが、コロナ禍によって事業縮小をやむなくされ、特にモンゴルツアーの壊滅は収入を大きく減らすこととなりました。

従って、なにか現金収入を得るための直接活動を拡大しなければならなくなったのです。簡単にいってしまえば…、会報しゃがあを出すことがしゃがあ設立の最初で、最大の目的でありながら、これの印刷、発行の意味は、しゃがあをしゃがあたらしめること以外にはなく、経済的視点からすれば、賛助会員が減っている現在、完全赤字部門となってしまっているのです。代わりには現金収益をあげるためには、くるまdeオストの店舗活動の拡大、充実、および新商品の開発、制作、販売、そして、インターネット事業の拡大が求められています。金にならないから辞めるということは決してないのですが、そもそも印刷代を捻出するために、ゴールデンウィーク時期から山菜採りに行かねばならず、かつ、これが体力にかなり負担をかけることとなっ

ています。加えてオンライン活動はその性質上、夜行います。そして山菜採りは朝早くからでかかれます…。日中は店番をしながら、ネットで商品売りのための作業やオリジナル商品製作作業…。

とまあ、いうわけで、しゃがあの発行がこんな時期になってしまいました。

ほぼ年度の終わりに出るしゃがあなので、記事の内容が何年度のモノなのか？適切なものか？だんだんわからなくなってきてしまっています…ごめんなさい。

2020年末に始めたシャーマン儀礼映像保存プロジェクトに端を発して、儀礼の上映会や文化講座などを広く多く開催することが増えていて、今回のvol.58でも当初は、私の知るシャーマンの一息をきき下ろそうと思って、書き始めたのが、5月末頃。そう、非常事態宣言で店を閉めることになり、山菜を採ってきても売れなくなったので、書き始めたんです。

私とシャーマニズムの出会いに始まり、フィールドワークにでかけ、出会ったシャーマンたちがどんな人で…と一大特集にしようと思っていました。12000文字ほど書いたところ、前振りが終わり、さてさて、いよいよシャーマン登場だ…というところで、編集方針転換をすることにきめたんです。

今号に掲載した南モンゴルの話を今載せなくてどうする？って思い至ったのです。ネット上では様々に流れているので、探せば見つかる話ですが、情報が多すぎてとっとと流れ去ってしまいやすいです。では印刷物になっているのか？と思ったところ、載せていてもよさそうところ…で、誰も何も書いていない…。この事件以前から岡田英弘先生は著書の中で中国的発想や歴史に対する態度などの危険性について述べていらっしゃるのですが、去年の秋から今までに印刷物になっているものは…ないということに気づいたとき、極貧者の一灯で、なにも明るくできないかも

しれないし、ただの自己満足なのかもしれないし、しゃがあの発行はさらに遅れるなと示したし、さらに、私が今回のような蛮勇を思出すことで敵を作ることになったり、支援くださった方々にご迷惑をおかけすることになったり、結果的に自分の首をしめることになったり、そして活動自体の縮小をもたらすかもしれないと、少し悩みはしましたが…。

やっちゃいました…。あーあ、やってしまったな。後悔なんてないですよ、もちろん。まあ、こんな小紙が何をできるやらって相手にされないかもしれないんですがね。

いかがだったでしょうか…。2021年もモンゴルに行けそうにありません。北海道の事務所までできる限りのことをやっています。数ヶ月に一度くらいの頻度で行商に出ています。

しゃがあの活動は人と人をつなぐこと、そのために人を集めること、理解し合うために必要な知識や経験を共有し合うことよって成り立っています。そう思うと、「場」を作り、人を集めることが憚られる今のコロナ禍は、NPO活動の大きな痛手となっています。

もはや個人ができることは出尽くしたし、やり尽くしたと思っています。自己判断で対処する段階になってきたのだらうとも思います。だから、私はいままで通り動き回ろうと思います。ですから、みなさんも、自己判断で、西村の生存確認(ネットでもできますが)でもしに、会場にお越しいただけるとうれいいます。難しかったら、ネットでも、会いに来て下さい。

理事長 西村幹也



熱くてのびてるエゾリスさん…

法人活動をご支援ください！

法人活動は会費および活動収益で運営されています。ご支援継続のほどお願いします。

正会員：年会費 50,000 円

活動への寄付金と会報しゃがあの購読料を含む年会費

ですが、以下の特典があります。

各種イベント優待割引

NPO 法人しゃがあで企画運営される「遊牧の民の調べコンサート」や各種イベント参加費用を優待割引します。

スタディツアー優待割引

夏や冬にしゃがあで企画するスタディツアーに割引料金にて参加いただけます。

オリジナル制作物のプレゼント

NPO 法人しゃがあで制作するオリジナルCD や DVD、絵はがきなどをプレゼントします。なお、これらの制作は不定期で行われます。

フェアトレード商品の割引

NPO 法人しゃがあで輸入販売予定のフェアトレード商品を優待価格でお求めいただけます。

北方アジア遊牧民博物館の優待利用

北海道羊蹄山麓にある北方アジア遊牧民博物館の場無料、および体験宿泊施設を優待価格で利用出来ます。

賛助会員：年会費 2,000 円

毎年レアで濃い内容満載の会報「しゃがあ」をお届けします。

会報しゃがあを定期購読する感覚でどうぞ！

会員お申し込み・送金方法

①ファックスの場合：

ファックスに [ご氏名、ご住所、お電話番号、E-mail アドレス (任意)、入会もしくは寄付の区別、寄付の場合は一般寄付かネルグイ馬頭琴基金寄付かの別、送金先口座] を明記の上、0136-42-2252 にファックスしてください。

②インターネットの場合：

<https://www.shagaa.com/form/join00> にアクセスして(必要事項をご記入の上、送信してください。)

しゃがあ
申し込みform



最新の活動予定は、
イベントカレンダーを
ご覧下さい！



しゃがあ
公式サイト



しゃがあ
Facebook



しゃがあ
Youtube



遊牧文化講座
アーカイブ



くるまdeオスト
instagram



くるまdeオスト
公式サイト

